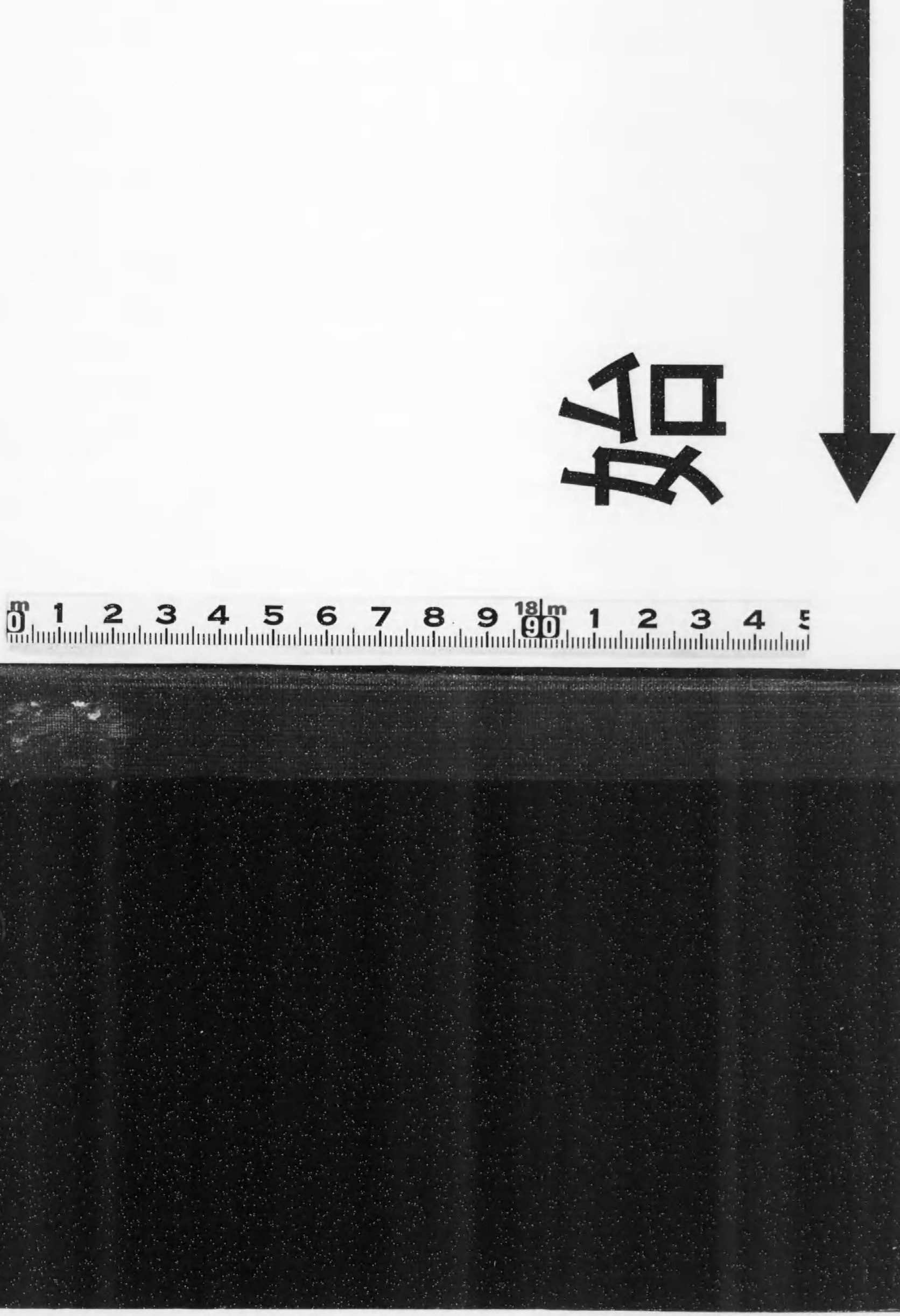
設

24. 6. 23

577-215

帝國圖書館藏

大阪

水上瀧太郎

大正
12. 4. 23
内交

大正
12. 4. 23
内交

一の一

大阪の停車場近い宿屋の三階の一室に、三田は疲れた體を投出した。薄暗い、切立てたやうな急な梯子段を上つた爲めに、上り切ると俄に骨身がゆるんでしまつた。

西向の窓をあけて見ると、霧とも霧ともつかない十一月の夕空が、近々と迫つて來た。目の下の家々の屋根の向ふに、平べつたく幅を取つて、黒ずんだ停車場の屋根が見え、その邊から夥しく煤煙を空に吐いて居た。家々の燈火と、賣藥の廣告塔の強い電光が、附近一帶に流れわたつて居た。汽笛を空に震はして、汽車が東に向つて出て行つた。

彼にとつて、大阪は今日迄緣も由緣も無い所だつた。中學の生徒だつた頃、博覽會を見に來たのが、後にも前にもたつた一度だつた。長い月日がたつたので、友達と一

緒に乗つたウォオタア、シユウトと、堀の深いお城の外は、何ひとつ覺えて居ない。

子供の頃夢中になつた繪本の感化か、生來さういふ性分なのか、しんねりむつつり底意地惡く天下をとつた德川家康が大嫌ひで、眞田幸村を崇拜した爲に、お城に對しては感慨が深かつたが、何處に行つてもせせこましく、贅六そのもののやうな町の有樣は、決して懷しい感じを起させなかつた。

今日になつても、彼は贅六といふ言葉の屬性であるところの我利々々貪慾吝嗇に、まのあたり取圍まれて、これからさき幾年間暮すのだらうと考へた時は、つくづく月給取の身の上をはかなんだ。學校の寄宿舍に居た時代の知つた顏も、少しはあるにはあるのだつたが、概して純粹の大阪人には知己が無かつた。學生仲間でも、どういふものか他の學生と交際はうとく、特種部落のやうに、一かたまりになつて居るのが、大阪から來る連中の特色だつた。朝も晩も、食事の時間が近づくと、未だ食堂の大扉の開かないうちから、手ん手に箸箱を持つて、拳骨でその扉を叩いたり、足で蹴つたりしながら、

「おゝい、あけろ、時間やせ。」

「あけんかい、阿呆。早うあけたらえゝやないか。」

聲を揃へてわめきながら、口汚く賄の給仕を罵るのがおきまりだつた。

「ちえつ、又浪花倶樂部が騒いでやがら。」

「贅六默れ。」

食堂に近い室々の學生は、義憤を發して怒鳴つた。勿論三田もその一人だつた。

そんな事を思ひ出せば出す程、大阪は賴り無い所だつた。數年前外國へ行く時に感じたよりも、もつと心寂しかつた。

「何しろ酒は本場だからね、こいつが第一樂しみだよ。」

持つて生れた負惜みをいひながら、腹の中では、東京を離れる事が、卑怯未練になさけなかつた。

一の二

その朝、三田は手鞄をぶらさげて改札口を出た。旅人宿や小料理屋、名物岩おこしなどを賣る店の、雜然と並んで居る驛前の廣場には、むかしの記憶が蘇つて來たが、行く先の方角さへ知らない身には、親み難い土地だと思ひ込んで居る爲めか、輕い不安が胸を打つて止まなかつた。

何時からさうなつたのか自分でも知らないのだが、三田は人力車に乘るのが、形の上からも心持の上からも、妙に羞しくて嫌だつた。その爲めに、右に行くのか左に行くのかも知らない癖に、電車道迄歩いた。

「道修町（ドーシュー）に行くにはこれに乘ればいゝのですか。」

折よく來た電車の踏段に片足かけないばかりにして訊いた。

「何だッ。」

「道修町に行き度いのですが。」

「何處だッ。——はよせんといのきまつせ。」

チンチンと合圖をすると、そのまゝ三田を取殘して行つてしまつた。

「旦那、行きましよか。」

お上りだと見てとつて車夫が、小走りに驅て來て、三田の當惑した顏を覗き込んだ。

「よし、行つてくれ。道修町（まち）だ。」

爲方が無いやと思ひながら、既に梶棒を下した人力車に乘つてしまつた。

車夫はけげんな顏をして、棒立に立つてゐる。

「道修町だよ。道修町（ちやう）つていふのかしら。」

東京と違つて、大概の町（まち）は町（まち）とは呼ばないと聞噛つてゐたのだつた。

相手も困つた風に首をひねつた。

「道修町（まち）さ。道は道、修は修身の修——かういふ字さ。」

彼は空中に大きく字を書いてみせた。

「あゝ道修町(ドショーまち)だつか。」

車夫は、なんのこつたといつた風な、人を馬鹿にした調子でいひ捨てると、直さま梶棒の中に身を入れて驅出した。

「なんだ、呑込の惡い奴だな。勝手に道修町(ドショーまち)なんて訛つて置きやあがつて。」

三田は一切の大阪人に對して反感を持つて苦り切つた。

車夫の驅方にさへ大阪の特徴を見出す事が出來た。東京の車夫のやうに、氣取つた驅方もせず、一定の歩調も無かつた。蟲のやうに小股に、只管がむしやらに驅けた。その狹い往來にも拘らず、無遠慮に速い。全く型に拘泥しない實利的の驅方だつた。彼は人力車に乘つて居るのが、愈々羞しくて堪まらなかつた。

橋を渡つて、又橋を渡つて、益々狹い通に入つたが、間も無く四角の古びた建物の

前で止まつた。二十幾年か前、落成した當時は、大阪最初の煉瓦造で、近郷近在から辨當を持つて見に來たといふ話を、東京を出る時古手の社員に聞かされて、さぞかし立派なものだらうと想像したが、今では煉瓦は崩れ、石は汚れて附近の新しい建物の眞中に、廢屋のやうに見えたのである。

受附の子供に名刺を出して、支店長室に案内して貰つた。かねがね氣むづかしい人だと聞いてゐて、内心びくびくして居たが、旅鞄を提げて入つて行つた三田を見ると、直に宿屋の心配をして呉れた。

「さあ、獨身者だと差し當り下宿を探さなくてはならないが、その下宿が大阪には少いからね。」

しきりに煙草を吸ひながら、首をひねつて居たが、社員の二三人を呼んで曾てその人々が獨身時代に居た下宿屋に電話をかけさせて、空室を問合せて呉れた。あいにく心當りはみんなふさがつて居た。結局、停車場の近くの宿屋に、假に荷物を下して、

明日は専門に下宿を探したらよからうといつて呉れた。三田は事務の引繼をうけて。その日から馴れない仕事に頭腦を惱ませなくてはならなかつた。

一の三

會社がひけてから、世話好らしい年とつた庶務係に案内されて、この三階の宿屋に落つく迄の一日を彼はぼんやり想ひかへしてゐた。

「えゝ、宿帳をお願ひ致します。」

番頭がやつて來た。妙にわざとらしく引呼吸でものをいふ若いのが、硯と帳面をさしつけた。

「永らく御逗留願へませうか、それとも明日にもお立ちでいらつしやいますで御座いませうか。」

「それがわからないんです。私は勤人なんだが突然此方の支店に轉越されて、來るには來たが居所はなし、格好の下宿が見つかれば明日にも引越したいが、さうでなければ止むを得ず四五日厄介になるかも知れない。」

三田は宿帳をつけ終つて、硯と共に押返した。

「えへゝゝ、恐れ入ります。いづれ東京から奥様も御出でになりますので……」

「冗談いつちやあいけない、獨身者なんだ。」

「えへゝゝ、御冗談を。」

番頭は二つ三つ頭を下げて出て行つた。

「何をいつてやがるんだ、面白くもない。」

三田は口の中で、馬鹿ッといひ度いのを堪へた。

番頭の足音が梯子段を下の方に消えると、入違つて忙しい足取りで、女中が御膳を運んで來た。

「旦那はん、御酒あがりまつか。」

「あゝ飲むよ。實は先に御湯に入れて貰ひ度かつたんだがなあ。」

「えらい濟まへんな。御風呂は只今ふさがつて居りますよつて。」

半分は廊下に出ながら、又忙しさうに梯子段を下りて行つた。

幅の廣い顔にお白粉の厚い、銀杏返しの兩鬢を思ひ切つてふくらませた女中のお酌で酒を飲むよりは、獨酌に限ると思つて斷つたが、先方は承知しない。

「そんなに嫌はんとお酌させて貰ひまつさ。東京の奥さんに叱られるやうな女子やおまへんさかい。」

三田はぐいぐい飲んで、飯を濟ませた。

其日も全く暮れてしまつた。停車場を中心にした燈火の町は一層光り輝いて、遥に澄んだ大空に反映して居た。彼は數年間外國を經廻つて居た間に屢々經驗した郷愁に似た感じを、その夜の景色の中に浮べて居た。

「御風呂があきました。おもての廣間に、お客さんが仰山來やはるさうにおますさかい。さつさとお入りにならんとうるさうおまつせ。」

三田は手拭を引つかむと、直に女中の後について出た。

湯殿の中は朧朦として、澤山の人間が入つた爲めに、腐つたやうな臭氣を立てた湯氣が、いつぱい籠つて居た。やめやうかなと思つたが、案内して來た女中の手前、今更三階迄引返す事も出來ないので、忌々しい感じにわくわくしながら、やけに素裸になると、手荒く全身に湯を浴びて、石鹸と脂肪の玉になつて浮いてゐる湯の中に飛び込んだ。

暫時すると、入亂れた足音と話聲が近づいて、五六人の男が一時に浸入して來た。

「すいとる、すいとる。」

云ひながら、褌袒を脱ぎ、しやつを脱ぎ、股引を脱いで入つて來た。

「や、どつこいしよ。あゝいゝ氣持だ。矢張日本が一番氣樂だね。」

「さゝさ。これでいゝ噂でも見つかりやあ尙更だぜ。」

大きな聲で笑ひながら、先客の三田を見て、その笑ひの仲間入をして貰ひ度い風だつた。

「みんな亞米利加から遙々女房を探しに來た連中なんです。」

その中の一人は、早くも三田に話かけた。

今朝神戸に上陸したが、今夜は大阪で一杯飲んで、明日は別れて各々の故郷に歸り、又來月の船で一緒に彼地に行くのだが、それ迄に女房を探すのだといふのであつた。

「君なんざあ御存じないでせうが、ステエッでは働きさへすりやあ金はいくらでも入りまさ。その癖、飲む博つ買ふで溜りつこはありやあしない。矢張女がなくちや眞當な根性てものは起りません。人間、女程有難いものはありませんからねハハハ……」

又しても高々と笑つたが、澤山の人間が動く度に動搖する爲め、湯氣の臭氣は愈々非道く、三田は胸が惡くなつて來た。

「どうかいゝ奥さんをお探しになるやうに祈ります。」

いひ殘して、彼は湯船を出た。

「サンキユウ、サア。」

頓狂な聲で、中の一人がこたへた。

三田は、湯に入つた爲めに、かへつて體が汚れたやうな氣がして、頭からざあざあ水をあびた。

一の四

三階に歸る途中、又五六人亞米利加歸りらしいのと、梯子段の眞中で出喰した。

自分の室には、ちやんと床が敷いてあつた。糊の堅い白い布で完全に包まれた枕と夜着に安心して、彼は其の上に横になつた。

廊下を距てたおもて三階の廣間の方は、非道くざわついて居た。梯子段を上つたり下りたりする足音と一緒に、盃洗に盃の觸れる音が聞こえた。

東京を立つ前は、毎晩々々友達と飲み歩いて居たので、體を横にすると、流石に疲勞は遠慮なく襲つて來た。遠くに汽笛の音を聞きながら、彼は何時の間にかうとうとした。

誰かに起されたやうな氣がして、目が覺めたが、誰も其處には居なかつた。そのかはり、想もかけない三味線が、多勢の笑ひ聲にまじつて聞えて來た。

宿屋の三階で、三味線を彈いて騷ぐ奴が居やうとは、全く意外だつた。三田は、思はず知らず半身を起した。

やすきせんげんなのでたところ
しやにちざくらにとかみやま

調子はづれにうたふ男の聲に、無理に合せる三味線がしどろもどろになつて、五六人が出たらめに手拍子を打つのともつれて來た。

The sun shines bright in the old Kentucky home,

'Tis summer the darkies are gay,

突然甲高い男の聲が、わざと氣取つた舌たらずの發音でうたひ出した。安來節も終ひに近づいて居たが、そのおしまひになるのを待兼て、押かぶせてうたひ出したのだ。すると、安來節の方も止めないで、負けるものかといつた風に、又一段と聲を張れば愈々調子をはづしてしまつて、三味線は遂々追つく事が出來なくなつた。五六人の女が一齊に笑ふのが、一際騷々しく家中に響きわたつた。

「あれえ、姐ちやん。」

男の惡ふざけに、救ひを求める若い聲が、障子を震はせたと思ふと、男と女の足音が入り亂れた。

三田は、厠に行くのにかこつけて廊下に出た。とたんに向ふの室の內側から、襖にぶつかる音がして、手荒くあけて逃出して來た藝者があつた。薄暗い廊下に、華美な色の紋つきの裾を曳いて、紅い蹴出の間から、土踏まずの無ささうな白足袋の足をペ

たべた踏んで、長い廊下を五六間驅出した。ふりかへつて見ても誰も追かけて來ないので、厠の前の壁にもたれてほつと息をついた。

「おゝしんど。」

通りすがる三田に聞けがしに呟きながら、帶の間から懐中鏡を出して、亂れた髪に細い手をあげた。

用事を濟ませて出て來ると、今の藝者は未だ其所に佇んだまゝ、一生懸命白粉紙で小鼻のところをこすつて居た。

三田は素知らぬ顔をして、自分の室に入らうとしながら、その藝者の逃出して來た襖のあいたまゝになつて居る間から、あかるい廣間の光景を一べつした。

Then my old Kentucky home good night,

歌の切目に近づいて、わめいて居た一人の聲が息切のしたやうに詰つて途切れた。と思ふと、殆どそれがその仲間全部の合唱だらうと思はれる多勢の聲が湧き返つた。

Weep no more my lady, oh, weep no more to-day;
We will sing one song for the old Kentucky home,
For the old Kentucky home far away.

一齊に拍手が起つた。

亞米利加歸りの一團がお膳を並べて居る間に、藝者の衣裳のけばけばしさが、幻燈のやうに見えた。誰かしら男同志で抱合つて、舞踏の眞似をしながら、下座から床の間の方にぐるぐると輪を描いて進んで行くのも見えた。

一の五

三田は又寢床の上に仰向になつて、徒らに天井を見詰めて居たが、騒ぎは何時迄も止まないので、眠らうとしてもなかなか眠れなかつた。

夜が更けて、流石に騒ぎ疲れたのであらう、鳴物も聞えなくなり、藝者も歸つて行

つたらしく、時折惰性でうたふ歌の節が、ものうく聞えるばかりだつたが、不意に元氣を盛返したやうに、亞米利加組は一齊に手を叩いて女中を呼んだ。

廊下に出て來た世話人らしい醉つた聲と、女中の問答をきいてゐると、これから遊廓に行く相談が始まつて居るのだつた。

「そんなら松島迄人力車云ひまんの。おいくたり。」

「みんなだ。十三人だ。大急ぎだせ。」

さう云つて引返したと思ふと、號令をかける聲で叫んだ。

「諸君、敵は松島方面にあり。突貫ッ。」

湧かへるやうな拍手が又起つた。

「えらいこつちや、えらいこつちや。」

一段々々梯子段を下りながら、女中のつぶやいて行くのが聞えた。

Ouward Christian Soldiers! marching as to war, ...

間も無くその一團は、口々に何かしらわめきながら、中には讃美歌を歌ふのもまじつて、醉拂つた足取で、階下に下りて行つた。三階の宿屋はしんとして、遠くの空に汽笛が聞えた。

翌日、三田は會社を休む事にして、下宿屋か、下宿屋と同じ程度の月極で置いて呉れるやうな宿屋を探す事にした。一刻も早くおちつかなくてはならない。宿屋に藝者が來て、遲く迄騒がれては到底勉强は出來ない。三年か、五年か、何年ゐる事になるかわからないが、兎に角此の大阪に居る間は、知人も少なく、身よりも無いのを幸に、一生懸命に勉强しようと考へてゐるのだから、どうしても靜な一室が必要だ。日當りのいい下宿を探して、他人にわづらはされる事無く、一人机に向つて、兼々腹案のある長編小說を書かうといふ、それが唯一の樂しみだつた。彼は、昨夜の三味線と、安來節と、Old Kentucky Home と、藝者の悲鳴を想ひ出しながら、今日にも此の宿屋を引拂ひ度いと思つた。

食事を濟ませて、近所で買つて貰つた鼻緒のゆるい下駄を穿いて、玄關先の石段を往來に出る時、西の方から十數臺の人力車が、勢ひよく此の横町に曲つて來た。車の上には、宿屋の褞袍を着た亞米利加團が、眩しさうに朝日に照らされて乘つてゐた。

往來に出るには出たが、下宿屋の心當りは勿論無かつた。誰かの小説に、女の事でしくじつて、東京に居られなくなつた若い相場師が、堂島裏の下宿屋にくすぶつて居る場面のあつた事丈が心に浮んでゐた。堂島の下宿といへば、既に何となく騒々しい感じはするが、川に近い町だと想像してゐたので、水の好きな三田には、存外いゝ處らしくも考へられた。

電車道へ出て、町角の煙草屋で道を訊くと、堂島は思つたよりも近かつた。ぶらぶら歩いてゐるうちにも、宿屋は澤山あつたが、どれもこれも立派過ぎて、到底乏しい月給では一週間もむづかしさうなものばかりだつた。下宿屋といふと、これは又上方風の薄暗い、日の目も見ない家造が、どうしても机を据ゑて本を讀む人間には住めさ

うもなかつた。あの小説の主人公も、相場にも愈々失敗して、はでな遊蕩をした昔を想ひかへしながら、くすぶりかへる筋だつたが、そんな廻り合せの悪い者でなければ住めさうもないところだつた。それでも二三軒は上つても見たが、何處も同じ天井の低い二階で、濕つぽい疊が足の下で、いやな音をさせて鳴つた。

一の六

ぐるぐる歩いてゐるうちに、何時の間にか、昨日停車場から乘つた人力車で通つた橋の袂に出た。其處から先には下宿なんかありさうもない景色なので、方角を變へて電車道を突切つて、細い通に入つて行つた。珍しく草つぱの空地があつて、子供が讃謨を投げあつてゐたが、其の空地を二階から見下す位置に、小體な宿屋があつた。赤い硝子に、杉の家と白く抜いた軒燈の出て居る格子戸の中は、一二間飛石が置いてあつて、安物の植木鉢も並べてあつた。

三田はその玄關に立つて呼鈴を鳴らした。ヂヂヂヂ……と奥の方で鳴るのは、押してゐる手に響くやうに聞えながら、取次はなかなか出て來なかつた。二度三度呼鈴の象牙の頭を押して待つた。

手ごたへはありながら返事がないので、ぼんやりして青い空を流れる煤烟を見てゐると、音をさせないやうに障子をあけて、丸髷の女の顏がのぞいた。うさん臭さうに三田の立姿をぢろぢろ見る目には、來意をいぶかる表情がはつきりして居た。

「私は東京から來た者で、永く泊めて貰ひ度いと思ふんですが。」

三田は帽子に手をかけて、何となく先方の親しみの無い態度に氣臆を感じながら云つた。

「室は空いてゐませんかしら。」

「へい、あいてゐないといふ事も御座りませんが、永くとおつしやいますと、一週間か十日——もつと御滯在にでもなりますので。」

「いゝえ、氣に入れば半年ゐるか一年ゐるか——三年五年お世話になるかもしれないんです。こつちで會社に通ふんだから。」

「へえ、おつとめで。」

女房らしい其の女は、流石に障子をすつかりあけて、疊に膝は落したが、矢張り三田を見上げ見下すばかりで、さつぱり埒があかなかつた。

「兎に角室を見せて貰はうぢやないか。」

此の程度の家ならば、月極めにして、どうかかうか暮しが立ちさうな氣がしたので、三田はづかづか上つてしまつた。

「なるたけ日當りのいゝ室がいゝね。」

「、え。」

女は多少まごついた形で、それでも今更止むを得ないで、廊下を奥に案内して行つた。

狹い中庭を挾んで、二棟になつてはゐたが、間數は二階を合せても澤山はなかつた。古びた木材もお粗末で、掃除も行屆かず、或る室には果物の皮や紙屑がちらかつたさゝになつて居た。

月極といふ事にして値段をきくと、

「あたしとこはお母さんと二人でお商賣をして居りまして、そのお母さんが折惡う留守におますので……」

何となく氣のすゝまない口ぶりで、結局、はつきりした事は云へないと云ふのだつた。それでも無理に大概の見當をきくと、三田が考へたよりは高い事を云つたが、それでも其の位なら、どうにか懷の具合はつきさうだつた。

「どうも少し西日が強さうだが、此方の狹い方の室にして貰はうかしら。」

少しでも安い方にしたいと思ひながら、もう其處に旅鞄を持込む事を考へてゐた。障子をあけると、空地を見晴らす四疊半だつた。

「へえ、まあお値段のところはその邊と思ひますが、何分お母さんがをりませんので。」

女房は同じやうな煮え切らない事を繰返して手を揉んだ。明かに斷りたい樣子だつた。何故そんな樣子をするのかしらないが、見くびられたか信用されないか、どつちみち面白くなく思はれるので、たつてもその室が執心だと云つて困らしてやりたい氣になつたが、又一方には、後になつて、母親といふのが歸つて來ると、忽ち法外な値段を吹かけられさうな不安も感じた。豊かでない懷の爲めに、どんな恥をかゝないとも限らないと思ふと當惑した。彼は中庭の眞中にあるちいさい瓢簞池に泳いで居る金魚に目を落しておもひ迷つた。

一の七

その時、中庭を距てた向ふの小座敷の障子があいて、寢衣のまゝの若い男が、楊子を啣へて縁側に出て來た。思ひもかけない人間の視線にでつくわして、吃驚して、又

座敷にかへりさうにした時、後から、華美な長襦袢のしどけない女が、もたれかゝつて男の肩に手をかけた重みで、よたよたと縺れて縁側に出た。女は一層驚いた風だつたが、女に特有の度胸を据ゑて、次の瞬間には、さも何でもないと云つた風で、その癖三田の方をぢろ〳〵見ながら、逡巡してゐる男を促して、湯殿でもあるらしい方に姿を消した。

女房はさりげない顔をして居たが、三田は動悸がして顔が赤くなつた。こいつは連込み専門かなと思つた。先刻からの相手のすゝまない心持がわかつた氣がした。

「では、君の方でもお母さんて人が歸らなくちやあ、しつかりした返事は出來ないといふんだから、私の方でも考へて置いて、後で電話をかける事にしやう。」

もう駄目だと思ふと、狼狽て廊下を玄關に出て、下駄を突かけて戸外に出た。格子の外で振返ると、丸髷の女房は細目にしめた障子のかげから、後姿を見送つてゐた。

宿にかへると、留守の間に會社から二三度電話がかゝつて來たと云ふので、直に此

方からかけて見た。

「あゝ三田さんですか。私は妹尾ですが、お宿は見つかりましたか。」

電話に出たのは庶務係の老人だつた。

「見付からない。あゝさうですか。それでは此方に一寸心當りがあるのですが、御覽になりませんか。會社の出入の印刷屋が敎へて呉れたのです。場所は天滿橋を南へ上つたところで――わかりませんか。かうつと、高麗橋筋と云つても御承知ありますまいし――さうです、お城のねきです、お城の。」

高臺の靜かな高等下宿で、おもに銀行會社商店などに勤る人が止宿してゐるといふ話だつた。値段はよくはわからないが、學生下宿とは違ふから、多少高いかもしれないと云ふ注意も聞いた。

「どうも難有う。兎に角早速行つて見る事にしませう。」

三田は、お城の近くだといふのが氣に入つて、これは屹度いゝ下宿に違ひ無いと思

つた。

壹飯を喰べると、もうおちついては居られなかつた。天滿橋を南へ上つたお城のね、きだといふ見當を、大丸地圖でつけて宿を出た。

行過ぎる電車の中に、天滿橋行といふのがあるので、追かけて乘乘つた。四つ五つ停留場を過ぎて、川上の遠く霞んでゐる長い橋を素晴らしい音を立てゝ渡ると、其處が終點で、その橋が天滿橋だつた。目の前の坂を上るのが、即ち南へ上るのだらうと思つた。

恰度坂を上り切つた角の酒屋の前に、生れて間もない赤ん坊をねんねこでをぶつた丸髷の、若いおかみさんが日向ぼつこしてゐた。少しそばかすの出た面やつれのした顏に日の光を浴びて、一皮下の血の色が透いて見えるのが、口の中で子守唄をうたひながら、體を左右に搖振つて、背中の子を寢かしつけやうとして居るのだつた。

「一寸伺ひますが、此の近所に權堂といふ家はありませんか。」

「權堂何といふ家で御座いまんのん。私とこも權堂と申しますが。」

おかみさんの顏には、見馴れない旅人の、きゝ馴れない言葉つきを珍しがる色が浮んでゐた。

「下宿屋です。」

「あゝ、そんなら彼處のお風呂屋の前のうちです。」

氣輕に店頭を離れて、赤ん坊のお尻に廻して居た手を延して指さした。

「彼處に子供が遊んでゐますやろ。あのうちです。」

「難有う。」

三田は帽子をとつて挨拶して別れた。

一の八

兩側ともしもたやが多く、その間々に、足袋屋、煙草屋、文具屋、駄菓子屋、床屋

などがあつて、恰度大きな學校の手前の湯屋の前に、宿屋が二軒並んでゐた。御旅館雪本といふ、今朝の杉の家と同じやうな赤硝子の軒燈の出たうちと、高等御下宿城西館櫻堂ろくと女名前の看板の出てゐる家だ。どう見ても、雪本の方が上等だつた。門口に立つ柳の枝の、長く垂れてゐる下に、打水のしてあるのもいゝ氣持だつた。

片方は上方風の、往來に面した室には、障子の外に格子のはまつた、しもたやづくりで、門口には止宿人の、本籍地と氏名を朱で書いた、黒塗の札が並べてかけてあつた。

自分の名前も出されるのかと思ふ丈でも氣が重くなつた。勝手口の暗い土間を覗き込んで佇んだ。足下の往來では、砂に圓を描いて、お河童の子が二人で、ごみかくしをしてゐた。

その一人は、疑ひ深い樣子で、三田の大きな外套姿を見上げて、砂を掻く手を休めたが、急に立上つて、門のなかの、僅ばかりの敷石に下駄の齒をきしらせながら駈込

んだ。氣がついて見ると、酒屋のおかみさんは、まだ向ふの角に立つて、此方を見てゐるのだつた。三田は、つかつか門の中に進んだ。

左手の玄關には、今駈込んだ女の子が、半分あけた障子につかまつて、物見の形で覗いて居た。鼻垂しの小ましやくれた樣子が、小憎らしかつた。

「お母ちやん、誰やら來てはる。」

土だらけの指を銜へた口の中で、奥の帳場の人を呼びながら、白目勝の、少し見當の違つた眼で、ぢいつと此方を見詰めてゐる。

「ちえッ、又やりやあがる。」

思はず知らず、三田は睨みかへしてやつた。一體人好のよくないたちなのに、不思議に子供には好かれる三田だつたが、好かれる迄のちよつとの間は、又恐しく怖がられた。ぎよろりとした目の玉が、他の人よりはまばたきの度數の少い特徴を持つてゐて、そいつが兎角たゝるのだつた。曾て或る有名な、夫妻揃つた詩人の家を初めて訪

問した時、未だ六歳位の男の子が、母親の詩人の肩につかまつて、客の顔にちいつと見入つてゐた。

「お母さん、あの人の眼怖い眼。」

母親の耳にさゝやきながら、その怖い眼を指さした。女流詩人は真赤になつて、肩につかまる子供の手を、たしなめる積りで握りしめ、それでもばつが惡いので、兩手で膝に抱上げて、懷に入れて頰擦りしながら、矢張りその怖い眼をぬすみ見た。同じ經驗を其後も屢々繰返したので、お河童の子の樣子を見ると、どうしても、又來やあがつたなと思はないわけには行かなかつた。

「お母ちやん、誰やら來てはる。」

二度目に子供が叫んだ時、母親であらう、奥の方で答へる聲がして、崩れかゝつた丸髷の、干乾びた四十女が、前掛で濕手を拭きながら出て來た。

一の九

「へいお出でやす。」

「あき間はありませんか。」

「へい、あんたはんが御泊りで御座いますか。」

云ひながら、子供と同じ白目勝の目で、遠慮氣も無く、三田の頭から足の先迄見上げ見下した。

「さうです。私です。東京から來たばかりなんだが、なるたけ靜かで、日當りのいゝ室が望みなんです。」

「さあ、お氣に入りまつしやろかどうだつしやろ。」

氣の無い返事をして、女房は矢張り白い目を光らせて居る。

「兎に角あき間があるなら見せて下さい。」

三田は梯子下駄を脱いで上つた。

「どうぞお上り。」

やうやく先方も立上つて、とつつきの梯子段を、先に立つて上つて行つた。女の子も後からくつついて來た。

往來に面した表二階の四畳半と、奥の八畳が只今あいてゐる室だと云つた。四畳半の方は往來が近過ぎてやかましく、向側の小學校の唱歌が、脅かすやうに響いて來た。

八畳の方は光線の入らない暗い室で、次の六畳との境が、銅づけにした襖一重だつた。その唐紙も畳も古び汚れ、梅雨期のやうな濕つぽい感觸があつた。

「もう外にはあいてる室はないのですか。」

「へい、只今はなア。」

「それぢやあ近日あくあてでもありますか。」

それでなければおしまひだと思ひながら訊いた。

「さあ、離室のお客さんが近いうちに、東京へ歸りはるさうにも聞きましたが。などいでつしやろ。あかん事もあるまいとは思ひますけどな。」

煮切らない返事をしながら、縁側の障子をあけると、狹い中庭を距てゝ、目に迫るやうに、新建の二階が見えた。

「あれが離室ですか。」

「へい、つい今年の春建てましてん。其處の廊下からずうつと行けまんので。」

「あすこは良さゝうだなあ。あれがほんとにあいて呉れゝばいゝんだが。」

六畳と三畳の二間續だといふその二階には心をひかれた。締切つてある障子に當る日の色迄、薄暗い此方の八畳には、望んでも得られないものであつた。

無表情な女房は、白い目をうろうろさせて居るばかりで、世間的な會話は不得手らしく、默りこくつてゐる。その袂につかまつて、鼻をすゝりあげてゐる女の子は、何時迄たつても三田の顔から視線をそらさなかつた。やめようかしらとも思ひながら、

騒々しい今の宿屋の三階には、財政上からも、何時迄もゐられない事を、三田は頭で忘れなかつた。

「それでは、あの離室の二階があいたら、外に望みてがあつても、屹度私が入れるといふ約束で、それ迄此の八畳で辛棒しようかしら。」

「へい、そないしてもらひましよか。」

折柄階下で赤ん坊のけたゝましく泣く聲が聞えた。

「やゝ子泣いたる。」

女の子は、始めて三田を見詰める事をやめて、母親の方をかへりみた。女房は泣聲に氣をとられて、既に廊下に出て梯子口にかゝつてゐた。

「それではと——明日から來てもいゝでせうね。」

「なんどきでも。」

晝飯は一切抜く事にして、一箇月の宿泊料を割引して貰ひ、夜具蒲團自分持なら、

その上に又割引くといふ事もきかされて、三田は明日を約して別れた。

一の十

次の日、三田は三階の宿屋を引拂つて、天滿橋を南へ上るお城のねきの下宿に引越す事になつた。大鞄を人力車に積んで、自分は手ぶらで車夫と並んで歩いて行つた。

今日も亦昨日と同じ相手とごみかくしをして居たお河童は、三田の姿を見ると逃げるやうに門内に驅込んだ。

「お母ちやん、昨日のお客さんきやはつた。」

赤い鼻緒の下駄を引くりかへして、玄關から奥に叫びながら消えた。取殘された相手の子は、門の柱につかまつて、こいつも三田の後姿を、さも珍しさうに見てゐた。

「ようおこし。」

女の子に袂にぶらさがられながら出て來たのは、娘とも女中ともつかない若い女だ

つた。

「お梅ちやん、これ昨日のお客さん。」

口に銜へて濡れたまゝの指をさして、女の子はやぶ睨の目を上げて三田を見た。

「どうぞお上り。」

お梅ちやんと呼ばれたのは、車夫の手から手提鞄を受取つた。

「大きい鞄はのちに運びますよつてに、玄關にあげといて貰ひまつさ。」

「そんならこれでよろしゆおまつか。——へい大きに。」

車夫は額の汗を拭きながら、手の平に銀貨を受けて歸つて行つた。

二階の八疊の薄暗い床の間をしよつて、三田はおちつかない居所を定めた。づしんづしん音をさせて、大きな男が、お梅と二人で大鞄を運び上げて呉れた。

「えゝ、私があるじで御座います。」

めくら縞の筒袖に前かけをしめた、いやに色の白い、ぶくぶく肥りの男は膝つ子をはみ出させて坐りながら挨拶した。

何處に勧めるのか、永く居て呉れるのか、大阪は初めてか——といふやうな、きさり切つた話を長々として行つた。

三田は、机の無い室の頼なさに、直にも買物に出なければならなかつた。來る道で見た三越に行つて、安物の机を註文し、手廻の物を整へ、その足で會社にも顔を出した。兎に角居場所もきまつた事を報告すると、

「へえ、下宿屋でお蚤飯ぬきで三十圓。驚きましたなあ。」

と妹尾老人は驚嘆した。

夕方、湯に入るのを樂しみにして下宿に歸ると、

「えらい済まへんが、私どこはお風呂場はおまへんけれどお風呂は沸せしまへん。お向ひがお風呂屋さんで、皆さんはいりにいて呉れはります。」

紫道具を運んで來たお梅が、言ひにくさうに斷つた。

「旦那はん、お酒あがつてだつか。」

「貰ひませう。」

せめてもの酒を樂しみにして、留守の間に届いて居た新しい机に肱をついて。本を讀むには難儀な位光力の弱い電球の、しかも煤けて曇つた下で、三田はうそ寒い下宿のはかなさを、早くも身に沁々と感じてゐた。

一の十一

暫時して、梯子段を上る足音と一緒に、皿小鉢の物に觸れる音が聞えた。お梅がお膳を運んで來たのだなと思ふと、二側目のくりくりした、頬邊の赤い、癖髪の女の樣子がはつきりと想像出來た。終日歩き廻つた空腹に期待を持つて、その癖知らん面をしてゐると、

「御免やす。」

と喉嚥に絡んだ聲で、襖をあけて入つて來たのは、見上げるばかりの背の高い、横幅も充分な婆さんだつた。

「御待遠さんで御座いました。そのかはり、このばあさんが、えゝお酌つけて來ましたせ。」

三田の膝近くお膳を押して來た。

「初めてお目にかゝります。私がこの家のあるじ、權堂ろくと申します。何分よろしう。」

しやがれた聲なのに、妙にねばり强く、無理にも聽手の耳に押入らなければ承知しない調子が、非道く不愉快だつた。

「私は三田です。」

「三田さんだつか。はて、それにしては見た事が無いオアハハ……」

分厚な齒ぐきをさらけ出して、男とも女ともつかない中性の笑聲で、大きな腹を搖

つた。

「ひつれいな婆や思ふてだつしやろ。さ、機嫌なほして酒ひとつオアハハ……」

苦り切つてゐる三田を見下すやうに坐つて、お銚子を取上げた。

「私ならお酌には及びませんよ。手酌の方が勝手です。」

特前の切口上で、三田は眞四角に坐り直した。

「そんな事いはんとお上りやす。」

二の腕迄もあらはに手を延して、お膳の上にのしかゝつて、盆々膝を乗出して來るので、三田は壓伏されて盃を取つた。

「ほんとに私は手酌の方が好きなんです。自分の飲み度いと思ふ時に飲めるし……」

思ひ切り惡く、辯解がましくいふのにおつかぶせて、

「これが若いえゝ女子やつたら、旦那はんかてお酌斷るいふ事あれしめへんやろ。あてがこないな婆でおますさかい。えらう嫌いはる。これでもな、鶯囀かせた昔もおま

つせオアハハ……」

しちくどく駄洒落を並べ立てゝ、一人で悦に入りながら、こぼこぼと音をさせて、先づ盃に酒をみたした。

「えゝお酌だつしやろ。あても御酒が何より結構でおましてなあ、毎晩頂きますよつて、お酒は吟味して居まつせ——よろしうおまつしやろ。」

たゝみかけて强ひられても、口にふくんだ酒の味は、舌の尖に强く、惡甘く感じられた。

「さうかなあ、私の口には少し甘過ぎるけれど。」

「何いふてはりまんね。甘過ぎる事あれしまへん。」

「好々だからね。一體何ていふ酒なんだらう。」

「金露だんが。金露いふたら、泉州堺で出來る一等のお酒だつせ。博覽會やら何やら

一の十二

婆さんは、口の中を唾でいつぱいにして、あく迄も金露の優秀を說いた。だぶ〳〵たるんだ兩方の頰邊から、はれぼつたい目のふち、大き過ぎる癖に餘り高くない鼻、殊にそのだらけた體つきが、妙にいやらしく不愉快だつた。黑々と染めた髮と、極端に蒼黃色い皮膚の色も胸が惡かつた。

これが表の看板にも名の出て居る人間だとすると、先刻大鞄を二階に運び上げて、自らあるじと名のつた男は何だらう。膳の上の、五切ばかり並んでゐる白身の刺身の皿と、半ぺんと靑味の浮んでゐるおつゆと、煮豆の小鉢の配列を、心寒く思ひながら、三田は重ねて金露を味つてみた。味と香と品といふ、酒の批判の標準から、どうしても一等賞には考へられなかつた。勿論酒の銘は必ずしも信じ難く、僞物の多い事はどの酒でも同じだが、それにしても現在口にふくむ金露は、うつかりすると頭に來さう

な脅迫觀念を伴ふのであつた。

「それにな、私どこは近くに酒屋の親類がおましてなあ、金露の本元から直接に取寄せて賣りますよつて、金露も金露、ほんまの金露だつせ。」

相手が如何思はふとも頓着無く、婆さんの口は愈々滑かだつたが、三田は其の話に誘はれて、昨日此の家を尋ねて來た時、角の酒屋の若いおかみさんの背景に、金露の樽のあつた事を思ひ出した。しかも同じ櫂堂だと、親類はあれに違ひ無いと思つた。

「あゝ、あの綺麗なおかみさんの居る家ですか。」

と口の先迄出かゝつたのを堪へて、又盃に唇をつけた。

何となく、あのおかみさんが親類だといふ事が、樂しい事に思はれた。

一本のお銚子はあけたが、ぷんと來る臭を持つた刺身は、一切丈け鵜呑にしたゞけで、御飯は味も無く、寧ろ苦しんで一ぜん喰べて箸を置いた。

「御酒もたんとはあがりませんな。」

「えゝ、毎晩一本で澤山。」

「お菜がお口に合はんと見えて、ちよつとも上つてやおまへんな。一せん御飯は縁起が惡い云ひまつしやろ。」

「縁起が惡くても爲方が無い。飯粒はあんまり好きでないんです。」

「旦那さん、飯粒たら云ふと罰が當りまつせ。けどなあ、下宿屋さんは大喜びやオアハハ……」

婆さんは笑ひながら、三田の押やるお膳を手元に引寄せたが、お銚子を逆さにして底に殘つた酒を盃にしたんで、ちゆつと音をさせてすゝつて、袖口で唇を拭いた。

「よろしうおあがり。」

頭を下げなゝお櫃を抱へて、褄を亂して立上ると、その儘廊下に出て行つた。襖をしめて、梯子段を下りて行く足音を聞きすまして、三田は思はずしらず吐息をもらしたが。

飲んだ酒がさめて來ると、下宿の二階は身に泌みて寒くなつた。申譯ばかりの埋火に手をかざしても、何處からか吹いて來る風が襟元に觸つて、ぞく〳〵する。ふ・氣が付くと、廊下の方の欄間には障子が入つてゐないので、玄關から梯子段を上つて來る往來の風は、いやでも應でも此の八疊に吹き込まなければならないのだつた。

三田は幾度となく嚏をした。

一の十三

東京の父母、兄弟、姉妹、友達に、新居の所在を知らせる葉書を書いて居ると、お梅が上つて來た。

「旦那はん、お床をとりまひよか。」

人なつつこさうな二側眼をしばだゝきながら、心持首をかしげて訊いた。

「あゝ、何もする事がないから寢てしまはふ。」

三田は此の人のよささうな女には、氣が置けずに口がきけた。

「お寂しうおまつしやろ。」

氣のない聲でうけて、直ぐに押入から夜具を出した。粗い井の字がすりの薄つぺらな敷蒲團には敷布も無く、たつた一枚のかけ夜具も、夏の物にも及ばない程で、こちらの枕が其處にころがつてゐるのを見ると、三田は全く風邪を引いた氣持になつた。

「おやすみ。」

お梅は叮嚀に挨拶して出て行つたが、三田は何時迄も机の側を離れる勇氣がなかつた。

それでも寒い室の中で、ぽつねんと坐つてもゐられなくなり、大鞄の中から外套や二重廻しを出して上にかけて、蒲團の中に身を横たへた。首筋に枕は堅く、敷蒲團は背骨に觸つて寢苦しかつたが、それよりも堪らないのは、いろんな臭のまじつた夜具の襟であつた。埃臭く、汗臭く、煙草臭いやうでもあり、髪油の匂もまじり、お白粉

の古びた香さへかぎわける事が出來た。三田は涙ぐんだ目を固くつぶつた。

それでもなか〳〵眠れなかつた。うと〳〵しかけた頃、襖一重隣室の客が歸つて來た。

「いやどつこいしよ。」

留守の間に敷いてあつた床の上に、胡坐でもかいた樣子で、がさ〳〵音のするのは夕刊でも擴げて居るらしかつた。直に後から梯子段を上つて來る者があつた。

「や、有難う、有難う。お梅ちやんにかぎるせ。」

わざとらしく音をさせて茶をすゝるのであつた。

「あゝ疲れた疲れた。年をとるとかなはんわ。一日中町を歩き廻つて、足も腰もいふ事をきかんやうになつてしまつた。お梅ちやん、あんじよう揉んでおくれんか。」

大阪でも東京でもない、ぎごちない聲だつた。

「いやあ、わるさしたらいやだつせ。お隣にお客さんやすんではりまんが。」

「誰が居たつて構ふもんか。」

「あれえ、聲出しまつせ。」

「聲立てたかてかめへん。」

手をとつて抱きすくめたのか、新聞紙の上に倒れかゝる物音に續いて、

「いやあ。」

身をすくめたやうな、咽喉のつまつたやうな、お梅の聲がせはしく聞えた。どたばたしたと思ふと、

「ハハ、、、、、、折角按摩を頼まうと思つたのに。」

太い男の冗談笑の中を、ばたばた逃げて行く女の足音が、やがて梯子段の下の遠くに消えた。

三田は胸がどきどきして愈々寢られなくなつた。

翌朝は早くから目が覺めた。階下の洗面場の暗いのと、狹いのと、汚いのには閉口

してしまつた。

外のお客は、みんな朝湯に行つて、其處で、うがひもすれば顏も洗ふのだと聞いたが、生れてから町の湯に行つたのは二度か三度しかなく、他人の前で裸になる習慣を持つてゐないので、どうしても氣がすゝまなかつた。

食事を濟ませ、洋服を着て、三田は會社に出て行かなければならなかつた。それがこれから毎日——恐らくは二年も三年も、繰返すべき生活であつた。

二の一

下宿屋城西館の持主權堂ろくは、亭主に死別れて十年になるが、殘された小金を資本にして始めた下宿屋も、今では名義人になつて居るだけで、弟夫婦の經營に任せ、そのかはりに月々極つた金を取上げる約束になつてゐた。

弟といつても異腹の弟で、二人共めい〳〵の母親に似た爲めに、顏の格好にも目鼻

の見當にも、似たところは見出せなかつた。おしやべりで、酒飲みで、自分でも下手な義太夫の三味線位は彈ける婆さんとは、うつて變つて、弟の方は酒も飲まず、遊び事も好かない、だんまりで、月々二度はかゝさずに、生駒の聖天樣にお詣りする外には、何の道樂も無いのだつた。

婆さんは口に出して、弟は腹の中で、お互に相手を馬鹿にし切つてゐた。弟にして見れば、近所の銀行に小金を預けて居るばかりで無く、此の下宿さへほんとは婆さんのものなのだから、月々の儲けの中から極つたものを拂はせられるだけでも忌々しかつた。厄介な子供も無く、自分一人で勝手な眞似をして、その癖けちんぼで、自分達には口やかましく干渉するばかりで何もして呉れない。あの婆々さへくたばればと思ふ事は度々ある。聖天樣におまゐりして、社前で商賣繁昌を祈る時も、婆さんの死と結び付けて願にかける事もあつた。それなのに此の頃は、兎角自分は氣のふさぐ、體の重い氣持がつゞいて、何となく大病にかゝる前ぶれのやうに感じられるのにひきか

へて、達者で風邪ひとつ引かない婆さんは愈々面憎かつた。

婆さんの方は婆さんの方で、自身が一切の利害をしよひ、小言の多いお客に對してつまらない心配をしたり、責任を負はされたりするよりは、弟夫婦に商賣を貸して、確實に貸賃を取つた方が氣樂だと考へて、寧ろ自分の方から進んで約束した譯ではあつたが、今になつて見ると、戰爭のおかげの好景氣で商賣は繁昌するし、儲けは以前の倍にもなるのに、やゝもすると自分を厄介者扱ひにし、まるで居候か何かのやうに取扱はふとする相手の根性が、許しては置けなかつた。子供の時分、頭のはちの開いた鼻つたらしで、何をしても近所の子供に負けてばかりゐた弟は、隨分馬鹿にしてゐたのだつたが、それが現に女房子を持つて、此の下宿の主人面をして居るのを見るとどうしても、のさばらして置けないぞと云ふ氣が起るのだつた。殊に弟が、先年或る大きな工場を持つてゐる石鹸屋の販路擴張係になつて、幾度となく四國路を廻つてゐるうちに出來合つて、うつかり孕ましてしまつたのを、のめのめ連れて歸つた女房と

いふのが、何から何迄氣が利かなくて、爲る事なす事一々癇癪の種になるのに、そんな女に惚れ切つてゐる弟は、ぢれつたい程見てゐられなかつた。夫婦の間に生れた子供の、二人が二人とも女なのは、決して不平では無かつたが、きりやうでもよければ兎に角、やぶ睨では、末始終うまい事もあるまいと思ふと、さういふ時に限つて他人の氣はしないので、自分自身の損のやうに腹が立つのだつた。

二の二

何時迄もこんな弟に、城西館を任せて置くと、自分に萬一の事があつた場合、根こそぎ弟夫婦にさらつて行かれるに違ひない。あんな奴等にうまい事をさせて堪るものか――婆さんは此の頃 そればかりが氣になるのだつた。

そのあげくに、吉野の麓の村に嫁に行つて、澤山の子供を殘して死んだ實の妹の娘のお梅を養女に貰つて、ゆくゆくは此の家を任せ、自分は長火鉢の側で煙草をふかし

て居る景色を想像して、一昨年頃から頻に掛合つて見たが、田舍者の氣の長さと、遠方に離れてゐる爲めに埒があかず、今年の春は、遂々此方から出かけて行つて談判した。それでも養女に呉れるとは云ひ切らないのを、兎に角人手の無い折柄、手助に借りる事にして、無理やり連れて歸つて來た。

當人もおそろしく氣にして居る癖髮ではあつたが、二重まぶたの目の可愛らしい小作な娘は、人前に出しても耻しくはなかつたが、如何にもぼんやりしてゐて、人のよすぎるのが、婆さんには物足りなかつた。ゆくゆくは自分の後とりにしてやらうと思ふ腹がある丈け、何をさせるにつけても、仕込んでやるのだといふ考へがぬけなかつた。お客の室に長く居る事、――殊に金も無い癖に、女さへ見れば冗談口をきゝ度がる客の室などから、お梅の壓殺したやうな笑聲の聞えて來る時などは、婆さんは默つて聞いてはゐられなかつた。こつそり梯子段の下に立つて、二階の氣配に耳をすます事もあつた。

以前から女中は屹度一人は居る事になつて居たのだが、婆さんの口喧しさと、喰べる物を十分に呉れないで、御飯のおかはりをすると白い目で睨まれるのに閉口して、大概は一週間か二週間で暇をとつて、此の處一二箇月は、殆ど全く居つかなかつた。

女中に給金を拂ふ心配は無し、飯を喰はれる怖れは無し、此の頃の景氣で貸家は拂底だし、普通の宿屋は素晴しく高し、あらゆる事が下宿商賣にとつて惡くなかつた。物價騰貴をいゝ事にして、客に喰べさせる物は極端に惡くし、おまけに分量もへらした上に、宿料の値上は組合の方で、思ひ切つてやつて呉れたので、實收入は愈々よかつた。どうしても弟夫婦に談判して、もうちつと月々の取上高をふやさなければならないと、婆さんは此の頃その事ばかり考へてゐた。

その頃城西館の客としては、表二階の六疊には、紀州の串本の網主だといふ爺さんが、いゝ年をして花柳病にかゝつたので、病院に通ふ爲めに上阪して滯在して居た。錢勘定がやかましくて、口小言が多く、婆さんと言ひ爭つた事も一度や二度ではなか

つた。

離室の階下の六疊には、堺筋の商店に通ふ番頭格の四十がらみの男がゐた。商賣人には似合はないむつつりで、燈火がついてから歸つて來ると、寢る迄新聞の夕刊を讀む外には、滅多に外出した事もなかつた。その二階の二間續きの、此の家では一等の室には、此處三箇月ばかり、東京に本社のある商事會社の社員が、社用を帶びて來てゐた。毎晩々々つきあひ酒に醉拂つて、時には宴會のくづれに何處かへ流れ込んで泊つて來る事もあつた。非道く大きな口をきいて、贅澤らしい眞似をしながら、懷ろは存外苦しくて、勘定を延ばす癖があつた。

梯子段を上つて直ぐの六疊には、貯蓄銀行の勸誘員がゐた。これが此の家では一番長く居ついた客で、やがて一年近かつた。如何いふわけか女房も子供も岐阜縣の田舍の里にあづけてあつた。酒好きで、晩酌の一銚子にいゝ機嫌になつたり、時々他所で飲んで歸つて來ると、お梅にからかつてしかたがなかつた。その癖世馴れた態度で人

をそらさず、婆さんの不平や述懐にも相槌を打つので、存外受けは惡くなかつた。

その隣室の、久しく空いてゐた八疊に入つたのが三田だつた。

二の三

「八疊のお客さんなあ……」

帳場の火の氣の乏しい長火鉢に寄かゝつて、煙管を銜へながら、退屈し切つてゐる婆さんは、臺所で晩の仕度をしてゐる弟に聲をかけた。

「あの三田さんたらいふけつたいな名前の人なあ、愛想氣の無いむつゝりした書生さんやと思ふたら、あれでも會社に出てはるのや。」

持つて生れたおしやべりで、無理にも相手を見つけてしやべりたいのに、弟は別段庖丁の手も休めず、何か野菜をさくさく切りながら、

「さうやさうな。」

と氣の無い返事をしたゞけで、流場にざあと水を流した。

婆さんは忌々しさうに、すばすば音をさせて吸つた烟草の烟を、ぷつけるやうに天井に吹きつけた。

阿呆め、女房は炬燵にあたつて、晝寢をしくさつてゐるのに、亭主が臺所で働いてゐる事があるか——と腹の中で弟を馬鹿にしたり、腑甲斐なさを憤慨したりしてゐた。

晩秋の日は暮れやすくて、障子は既に暗くなつてゐた。流場の水の音は、愈々忙しなく家の中に聞えるのであつた。

慾ばりぢいさん曰借りて

それで餅をついたらば

瓦や瀬戸かけ

がらがらがら

細く黄色い子供の聲と、それに合せて歌ふ低い女の聲と、敷石にきしむ利休下駄の

音が聞えて、お梅につれられて遊びに行つた子供が歸つて來た。

「お母ちやん、お菓子ん。」

女の子は玄關に上がると直ぐに帳場に馳込んで來た。お菓子を呉れる母親が居ると思つたら、怖い顔付で睨む婆さんだつた。

「お母ちやんは。」

「お母ちやんは畫間からねんねしてはる。」

婆さんは、奥で樂寢をしてゐる弟嫁に聞えよがしに、取附場もない調子で答へた。その惡意のある態度は、子供にもよくわかつた。

「お婆ちやんの根性惡る。」

下顎を突出して、二つ三つとん〳〵と蹠で疊を蹴つて、お河童の頭を振亂して母親の方にかけて行つた。

「何ぬかす。ひんがらめ。」

心底からやぶ睨の可愛氣の無いのを憎んで、婆さんは煙管を長火鉢のふちで手ひどくはたいた。

「只今。」

「今日は。」

買物の風呂敷包をかゝへたお梅と、乳呑兒を背中にしよつた親類の酒屋の若いおかみさんが、連立つて入つて來た。

何だ彼だとおしやべりをしあつてゐるうちに、そんな事さへ珍しい出來事かなんぞのやうにお梅がいふのだつた。

「あの二階の八疊のお客さんなぁ、一昨日うちへ來やはるとき、むこの辻でおそのさんに權堂いふ家は何處や云ふて訊ねはつたさうな。」

「へえ、左樣か。」

「私が敎へてあげたんや。」

丸髷の髪のおくれ毛の、眠つて居る赤坊の顔にかゝるのを氣にしてゐた酒屋のおかみさんも、一膝火鉢の方に乗出して話に加つた。

「あのお客さん書生さんだつか、きつちりした物言ひで——私江戸詞(えどつこ)好きやわ。」

二の四

婆さんは、話相手の出來たのに滿足して、ゆるゆると鼻の孔から煙草の煙を立上らせながら一人でうなづいた。

「ほんまに書生々々してはるが、あれでもなんたらいふ會社の月給取や。」

「へええ、そない見えへんなあ。大けな體して、こないに歩きはつて、大學校の生徒さんかしら思うた。」

「會社のお勤やつたら、えゝ給金取りはるのやろか。」

別段外に話もないので、お梅も共々に新來の客の噂に身を入れた。

「私かてしらん。」

婆さんは叱るやうな調子で、

「それかつて大概人柄を見たら、わからんいふ事あれへんせ。一目見て、はゝあこの人は金持や、あの人は信用の出來ん人や——直ぐに見分けるのがこの商賣の一番肝要な所や。八疊のお客さんかつて、大した荷物があるではなし、古い鞄が一つ、穿いて來た下駄も上等の品ではないし、年齢も未だ若し——斯う數へたら大概知れるやないか。」

過去の經驗と年齢の効はこんなものだといはんばかりに、婆さんは一際煙草を味ひ深く吸つた。

「おやおや、しやべつて居るうちに暗うなつた。早よ歸らんならん。」

酒屋のお女房さんは、背中の赤ん坊のお尻に兩手を廻して、一搖り搖り上げて立ちかけた。

其の時、玄關に靴の音がして、三田が會社から歸つて來た。

「お客さん歸りはつたせ。」

誰よりも早く氣が付いたのは自分だと相手に知らせる爲めに、婆さんは、大きな聲で怒鳴つたが、矢張り落つき拂つて烟を吹いてゐた。

「お歸り。」

婆さんの聲に促されて、お梅は式臺に出迎へた。

「只今。」

ぶつきら棒に、しかも押かぶせるやうな聲で答へて、靴を脱ぐと直ぐ、わき目もふらずに力のある足取りで、梯子段を踏鳴らしながら二階に上つてしまつた。

「はでな顏してはるな。」

うつかり口に出したのを心がとがめて、酒屋のお女房さんは少しばかり顏を赤らめながら、今更やめられもしないので、思ひ切り惡くつゞけた。

「目が大きうて、鼻が高うて……」

「怖いらしい顏だんが。」

あんまり好意を持つてゐない婆さんは、聞捨てには出來ない樣子で、相手の口をつぶらせた。

「えゝ男前いふ事あれへんで。離室のお客さんのやうなんが、ほんまの好男子や。色が白うて、細面で。私がもう一廻りも若からうもんなら、だまつて放つては置かんのやがなあ。」

「いやなお婆ちやん。」

たしなめながら、お梅も赤くなつて笑つた。

「私はあんな役者見たいな男好かん。白粉塗つて、じやらじやらして。」

「おそのさんは矢張り三田さんがえゝのんか。他所の男に惚れたりして、旦那さんに告げたろ。」

「いやなお婆ちやん。」

酒屋のお女房さんは漸く立上つて、

「歸ろ、歸ろ。」

といひながら、又利休下駄の齒を鳴らして歸つて行つた。

二の五

晩のお膳はお梅が持つて上つた。机に向つて、一生懸命になつて本を讀んでゐる三田は、さも面倒臭さうに坐り直した。

「お待遠さん。」

お銚子を取上げて勸めると、一口つけて、

「はゝあ、博覽會で一等賞を貰ははつた金露か。」

存外機嫌よく冗談をいひはしたが、言葉の調子が重苦しくて、小言をいふやうに響

くのであつた。

「お口に合ひまへんか。」

「どうも少々甘過ぎる。これ、あすこの角の酒屋から取るの。」

「へえ、うちの親戚になりまんので。」

お梅は一寸口籠つたが、

「あの家のおそのさんいふ嫁さんが、貴方さんに道を訊ねられたいうてはりました。」

「あゝ、あの綺麗なおかみさん。おそのさんていふの。いゝ名だなあ、少し義太夫地味るけれど。」

三田の鋭い目尻に、意外に優しい笑皺が浮んだので、お梅も多少氣安く感じて來た。

「若い頃は綺麗におましたけれどな、やゝ兒生みはつて、とんとしよむないやうにならはりましてん。」

「しよむない事があるものか。今でも隨分綺麗ぢやないか。」

三田は盃を重ねながら、きれぎれに覺える大阪言葉を興がつてゐた。

「おそのさんも貴方さんを、はでなお顔やいうてはりました。」

「冗談いつてら。」

それつきり言葉が途絶えて、三田は思ひ出したやうに箸を動かして、煮豆を口に運び始めた。

「三田さん、お客さん。」

一段々々梯子段を拾ふやうに上つて來た女の子が、襖の外で呼んだ。

箸を置いて立上つて、づかづか下りてゆく後から、お梅も玄關について行つた。けたゝましい音を立てゝ、門前に乘捨てた自動車が待たせてあつた。

「やあ、三田公ゐたな。」

脊の高い、外套姿の男が、筒抜けの高調子で聲をかけた。

「偉い所に住んでるんだな。どうだ下宿は。」

「どうつて事もないよ。まだ來たばかりなんだから。まあ上つて見て呉れないか。今恰度飯を喰つてるところなんだ。」

「なんだ、僕も飯を喰ひに行かうと思つて誘ひに來たんだ。くるまも待たしてあるんだぜ。」

「兎に角上るさ。自動車は歸したつていゝだらう。贅澤過ぎるよ。」

「なあに、社のくるまなんだ。」

客は大跨に門の外に歩いて行つたが、自動車に歸れと命じてゐる高調子の聲はよく聞えた。直に自動車は町の遠くに走り去つた。

二階に上つた客の聲は、階下の帳場にゐる婆さんの耳にも聞えた。

「非道え御馳走だなあ。蒟蒻に油揚、煮豆に豆腐か。」

障子を震はせる高笑がその後に續いた。

二の六

主人と客は親しげに、お膳を挾んで向ひ合つた。

「どうだい、君の御膳も貰つてやらうか。」

「御免だ御免だ。俺は蒟蒻と蛞蝓が大嫌なんだ。」

「それぢやあ一杯飲まないか。博覽會で一等賞を貰ははつた御酒だぜ。」

「よせよ面白くもない。それよりいゝ所へ連れてつて、うまい物を喰はしてやらう。」

とは云ひながら、差しつけられた盃を受けて、お梅の酌ぐ酒を一息に飲んだ。

「いかんいかん。」

大仰に顔をしかめて立上つて、障子をあけて屋根の上に、べつべつと唾を吐いた。

「こいつあいかん。」

珍しく並びのいゝ、眞白な小粒な齒の間から長い舌を出して、その齒で舌に殘る悪

酒の味をしごいてゐた。

「おい、出かけやうぢやないか。上方のほんとの酒を飲ませてやるぜ。」

「まあ今度にして呉れ。今日は少し御風邪氣なんだ。御覽の通り欄間が空いてるもんだから、一夜にしてやられちやつた。」

「だつて俺は腹が減つてるんだ。」

「だからお膳を出さうつていふのさ。」

「むちやいひよる。社長さんの召上る御膳ぢやあないや。どうしても外に出るのがいやなら、俺は寧ろ饂飩を喰ふよ。素饂飩て奴をね。うめえぞ。」

「それぢやあ、そいつを喰べて貰はうぢやないか。お梅さん近所に饂飩屋ありますか。」

「饂飩上つてだつか。幾ついひましよ。」

「俺は三つだ。三田公は二つだらう。それからついでに、お饅を澤山買つて來て呉れ給へ。」

客は主人の分迄も註文して、それからは高聲で、お梅にはわからない事を論じ始めた。

不用になつたお膳を下げて帳場に行くと、婆さんは待構へゐて訊いた。

「あのお客さん何や。」

「何や知らんが自身で社長さんやいうてはつた。」

「ふうむ、社長さんか。自動車持つてるのやな。」

婆さんは度膽をぬかれたやうに感嘆して、その客を尊敬すると同時に、さういふ人を友達に持つ三田に對しても多少尊敬の度を増した。

「私これから饂飩いうて來んならん。うちの御膳なんぞあかん云ふてはる。」

お梅は臺所の下駄を突かけて出て行かうとした。

「饂飩？」

意外な事をさいつた風で、婆さんは中腰になつた。

「お梅、お前近間に洋食も御座りますと云うたか。」

「いゝえ、饂飩がえゝ、素饂飩がえゝのやと初手から云うてはるのやもん。」

「阿呆らしい、お前が氣を利かさんからいかんのや。」

他人事ではないやうに忌々しがつたが、驅出してゆくお梅の下駄の音は、もう既に門の外の往來に聞えた。

二の七

客の田原は三田の學校友達だつた。播州龍野の酒造家の次男で、中學時代には、三田は小説家にならうと思ひ、此の男は社會改革者たらん事を理想とした。早くからマルクスの著書などを讀み、歐羅巴のその道の先達の傳記に夢中になり、若い時代には免れ難い感激癖から、獄裡の人となる事や、斷頭臺に上る事さへ、情熱に燃える夢想として胸底に描いてゐたが、その傾向は何時も三田の嘲罵の的になつた。三田の言葉

は隨分手酷しいものだつたが、その眞意は、友達の一時的の狂熱をさまして、大地に
踵をつけて歩かせ度かつたのである。
「たとへば時代を溯つて佛蘭西に生れたとして、君は勿論共和黨の陣笠として街頭で
演説をする人間だよ。しかし又平和の日が續いて、國民は徒らに葡萄酒に味覺をほこ
る時代になり、外からは獨逸が壓迫して來ると、君は以前にも增した熱情を以て王朝
復歸運動を起す人間だよ。何でもいゝんだ。少しばかりの危險がともなひ、喇叭を吹
き、旗を立てて、町中を練廻り、演説さへしてゐれば。」
「そいつは非道いや。そんなんぢやあないよ。」
「非道い事があるものか。そんなんだよ。」
三田の批評は何時もさういふ意味だつた。尤然たる資本論を讀破する根氣は無く、
手取早く宣言書に感激し度いのだつた。勿論かういふ批評を素直に受入れる田原では
なく、自分の信念を熱烈な調子で披瀝して、相手が聞きあきる迄喋らなければ承知し

なかつたが、心の中では多少思ひ當る事がなくもなかつた。
やつとの事で學校を出ると、三田は外國に行つてしまつたが、田原は紡績會社に入
つて月給を貰ふ身になつた。其處にこそ全力を傾けて改善の實を擧ぐ可き事柄が澤山
あると思つてゐた。工場の機械の音は日夜耳にするけれど、彼の仕事といへば最も不
得手な算盤を彈く事以外には何も無かつた。勞働問題に觸れたのでも何んでもなく、
一年たつたかたゝないのに、事務員の生活には全く倦き果て、たまたま上役と些細な
事から口論したのをいゝきつかけにして、彼は辭表を差出した。
暫時遊んで居るうちに、父親も心配し、いゝ顏の役人に出世して居る叔父も口をき
いて呉れて、今度は船會社に入つたが、此處では海員の手當要求問題の起つた時、別
段自分達陸上勤務者には關係もない事なのに、兼々事あれかしと待つてゐたところだ
から、會議の場所にも出しやばつて、多少煽動的な應援演説などもやつたので、當時
未だ使用人の氣勢のあがらない時代だから、一も二もなく首謀者と共に首になつた。

もう月給取はこりこりしたと稱して、實は月給取なんかは自分の本領ではないと云ふ自負心も見せて、新領土の視察を口實に、樺太や朝鮮や滿洲を旅行してゐたが、又更に一年ばかりたつと、矢張り父親と叔父の勢力で、阪神間に新設された車輛會社の取締役に就任した。

今度突然三田が大阪に來るやうになつて、誰よりも一番喜んだのは田原だつた。

饂飩を喰べ、おまんも平げて、喋り疲れた田原の歸つたのは夜更けだつた。

三の一

四日五日たつうちに、三田は會社の仕事は段々手について來たが、下宿の住心地はなかなか安定しなかつた。欄間に障子が無い爲めに、曉方は夜着の襟から冷い風が入つて目が覺めた。引込んだ風邪も何時迄たつてもぬけさうもなく、のべつに嚏をして鼻をかんだ。あんまりつゞけさまなので、鼻の頭は赤くなつてしまつた。

どの室の客も、寢衣のまゝ楊枝を啣へて、向側の湯屋に出かけたが、三田はあさましい裸體を人前に曝し、他人の脂肪や垢の浮いてゐる臭い湯に入り、おまけにその他人が得手勝手で、流場に小便をする奴もあれば、手鼻をかむ奴もある、花柳病の黴菌をしたのさへゐるのだから、生來の潔癖が承知して呉れなかつた。彼は殆ど誰も使はない薄暗い洗面場で、冷い水で全身を拭いた。

「貴方さん、お風呂はお嫌ひだつか。」

ばけつに水を汲んで呉れるお梅が訝かしさうに訊いた。

「嫌ひつて事もないんだが。」

あいまいな返事をして濡手拭をしぼつてゐると、帳場から婆さんも聲をかけた。

「向ひのお風呂屋には、えゝ娘さん居てはりまつせ。番臺の上にちんとすまして坐つて、三田さん見たいな若い男はんが來ると、見るやうな見んやうな目つきしやはつてな、離室のお客さんやつたら、わざと手ぶらで歩いたるのや云うてな、をかしおまん

が。まあ一遍行て見なはれ。ほんまに別嬪さんだつせ。」

年とつた女に特有のみだらな口をきかれて、三田は返事に困つて二階に上つたが、何時迄も湯に入らないでも居られないので、その次の日は思ひ切つて行つて見たが、別嬪の娘はゐないで、だぶだぶ肥つたお婆さんが坐つてゐた。畜生いつぱいかつがれたかなと思ひもしたが、人前で裸體になるのなら、相手は若いよりも年とつた方がいゝと思つた。

久しぶりで湯に入つて、ぼうつとする程いゝ氣持で下宿の門を潜ると、待構へてゝも居たやうに、

「三田さん、ほんまに別嬪だつしやろ。」

と婆さんは卑しい笑顔をして云ふのだつた。何を云つてやがるんだ、嘘つきめ、と思ひながらも、

「えゝ、大したものですね。」

と輕く受けて、どん〳〵二階に上つてしまはふとした。

「おそのさんよりも。もひとつよろしうおまつかオアハハハ……」

婆さんの高笑が家中に響いた。

それでもそれがきつかけになつて、翌日も又湯屋に行つたが、格子をあけると目の前の番臺に、ほんとに十八九の娘が、襟つきの古風な服裝をして、眞白に白粉を塗り、眞新しい銀杏返の頸を据ゑて坐つてゐたので、思はず知らずぎよつとしたが、まゝよと思つて裸體になつた。矢張り湯屋は行き惡かつた。

夕方歸つて來ても、欄間の風を氣にしながら、あたじけない火鉢の火に噛りついてゐるのは心細かつた。きれいなお女房さんに免じて、金露の味は我慢するけれど、お膳の上の貧しさは、喰辛棒の三田にとつては隨分辛い事だつた。たまにつく魚の切身の、寒い頃にも拘らず、鼻を衝いてむつと來るのは、幾日か店に曝されたものに違ひ無かつた。いゝ加減にお膳を押しやつて、おもてに出て、田原の好物の饂飩屋に腹を

こしらへに行く事もあり、いち早く關東煮の味も覺えた。

三の二

扨て勉强しやうと思つて、暗い電燈の下で机に向ふけれど、夜の寒さは骨身にしみ、欄間の風は愈々冴えて、どうしてもおちついて本を讀んだり、書き物をしたりする事は出來なかつた。こんな室に居ては、年中風邪の引通しで、何もする事は出來やあしない。若しも外の室があかないなら、轉宿の外に道はないと考へ始めた。

幸ひな事には、恰も豫て約束の離室の二階が空く事になつた。その室の客は、何處かで泊り込んで來るのか、勤務の都合で歸りが遲いのか、あたりまへの時間には、なかなか宿に居なかつた。三田は僅に一度廊下で擦違つたばかりだつた。戸外から歸つて來たところで、派手な縞羅紗の背廣に綠色の外套を着て居たが、綺麗に化粧の行届いた、てかてか光る顏に薄く白粉でも塗つたやうな男だつた。それが東京へ歸る事に

なつたのである。

愈々明日は立つといふ日の夕方、三田が會社から歸つて來ると、離室では酒宴が始まつてゐた。醉つた男の聲にまじつて、若い女のはしやいだ聲が湧きかへるやうに聞えた。

らめちやんたらぎつちよんちよんでばいのばいのばい
ばりことばななにふらいふらいふらい
わけのわからない文句に節をつけて合唱し、中には手拍子をたゝく者もあつた。止んだと思ふと又始め、繰返し繰返しうたふのだつた。

「なんだい、あれは。」

「流行つてまんね。」

此方の室に給仕に來たお梅は、三田の問に事も無く答へた。

「女の人は。」

「同じ會社の女子はんだす。松野さんいはゝるのは、よう遊びに見えるお方で、七分三分たらいふて、こないして、こないして、偉いはいからさんに結ふてな……」

お盆を持つた手をあげて、右に分け左に分け、後の方で束ねる眞似をして見せた。

同じ會社の女事務員が、男の社員の下宿に遊びに來るといふ事は、よくある事には違ひ無いだらうが、目の前に實際を見るのは初めてだつた。勿論好奇心は動いたが、さういふ事に立入つて、根深く探りを入れるのは恥づべき事だと思ふ心が强かつた。殊に相手のお梅は口數が少なかつた。

らめちやんたらぎつちよんちよんでばいのばいのばい

又一しきり聲をからしてうたふのを聞きながら、三田はお茶漬をかき込んだ。

隣の室の貯蓄銀行員の方には、婆さんがお給仕に出てゐた。襖一重の話聲は時々はつきり聞えて來た。

「若い者にはかなはんな。此方だつて、あゝいふ時代もあつたんだが。」

「何いふて。貴方今でもおもろい事だらけやないか。」

「近頃とんとおもろい事もないせ。羨ましいな。同じ會社に勤めて居る男が三人、女が三人。飲んで、食ふて、歌ふて……」

「それからさきは。」

「えゝ勝手にしやがれ。畜生奴。」

男の聲には晩酌の酔が絡つて來た。

「オアハハハハ……、そんなにけなりがらんと貴方も一番負けずにやつたらよろしいがな。さつさ浮いた浮いたいふてな。」

「そんな事云つたつて一人じや始まらないや。」

「ほんなら男はんの腕で、えゝ相手をこしらへたらよろしいがな。まゝさうふさがんとひとつ上んなはれ。——おや、すつかり空になつてしまふた。どれ、もひとつつけ

て來ましよ。こつちもメートルあげんならんオアハハハハハ。」

あたりを憚らぬ高笑ひをしながら、婆さんはお銚子の替りをとりに立つた。

三の三

三田は强ひて机に向つて讀みかけの本を開いたが、離室のばいのばいのばいは何時迄たつても止まず、手を叩かれてはお銚子を運ぶお梅の忙しない足取も、廊下に繁く聞えて來る。一方隣の貯蓄銀行員も、何時の間にか酒好の婆さんと盃のとりやりになつて、少からぬ德利の數を倒し、漸く呂律もあやしくなつた。

「あゝ醉つた、醉つた。酒は憂の玉箒か。いゝ氣持に醉ひは醉つたが、扨て一人では始まらずと。」

「やめとくなはれ、いやらしい。そないにかつえてはるのやつたら、おくにから奥さん呼んだらよろしうおまんが。」

「あんな婆がどうなるもんか。」

「御挨拶だんな。私かてお婆さんだつせ。可哀さうに。」

「お婆さんにもいろ〳〵あるとさ。水々しいのも、干乾びたのも。——ひとつお酌しまひよか。」

三田は思はず聞耳を立てるのだつた。世間擦れた年とつた男と女の、酒にだらけた口を衝いて、聞いてる者が赤面する程の猥談が續出した。

「いや、もういかん、いかん。此の上飲んだら醉ひつぶれてしまふ。」

「醉ふたら介抱してあげまつさ。」

「これがもひとつ若けりやあなあ。」

「好かん人。」

どすんと音がして、

「あやまつた、あやまつた。」

と男の聲が聞えたのは、背中でも叩かれたらしかつたが、そのまゝごろりと横になる氣配がした。

ばりことばななにふらいふらいふらい

離室の方も騒ぎ疲れたのか、女の歌ふ聲はやんで、たつた一人太い男の聲が惰性で調子はづれに張上げられてゐた。

夜更け迄騒いだ男女は、手をとりあつて歸つたらしかつた。

「おたのしみ。」

「おごつて貰ひまつせ。」

なぞと、女の聲もまじつて、口々にいふのは、門前の往來で別れたのであらう。

「あゝ疲れた、疲れた。」

玄關迄送り出した離室の男は、三田の室の前で欠伸をして引上げて行つたが、直ぐにはげしく手を叩いて、

「おゝい、お梅さん、此處をかたづけて床とつてお呉れんか。」

咽喉にからんだ聲を張上げて怒鳴つた。

「へえい、只今。」

梯子段を駆上つて來たお梅は、酒宴の後始末の瀬戸物の音をちやらちやらさせながら、幾度となく離室と臺所を往復してゐたが、やがて用事も濟んだと見えて、三田の室にも床をとりに來た。

「えらい騒ぎで濟みませなんだ。」

叮嚀に頭を下げて詫びた。

「やつとみんな引上げたと見えるね。」

一頁も進行しなかつた本を閉ぢて、三田も大きな伸をした。

「いゝえ、小指(これ)がゐてはりまつせ。」

水仕事に赤くはれたやうな小指を出して、離室の方を指さしながら、自分自身が羞

かしさうに笑つた。

三の四

枕に頭をつけてもなかなか眠れなかつた。何時の間にか婆さんもゐなくなつたのであらう、隣室からは高鼾が聞えて來た。

翌朝三田が身支度をして、會社へ行かうと廊下へ出ると、出會頭に厠から出て來た若い女に出つくわした。寢不足の顔に七分三分の束髪の亂れかかつたのが、別段羞しさうな樣子も無く、おちつき拂つて手を洗つて摺れ違つた。小柄の體に男物の浴衣を重ねて寢衣がはりにし、淡紅色の腰紐を胴中の一番細い所にくびれる程堅く締めたのが、裾をずるずる引擦り乍ら、離室の方に上草履を鳴らして行つた。

その夕方には、離室の男はもう立つた後で、會社から歸つた三田は、留守の間に荷物を運ばれてゐて、新しい室の客となつた。おまけに東京へさういつてやつた夜具蒲

團も屆いた。づつくの袋に押詰めてあるのを引出して見ると、中には眞新しい座蒲團迄入つてゐた。直ぐに、うすべつたい板のやうな汚點だらけの下宿のやつを次の間にほうり出して、新しいのと敷替へて机の前に坐つて見た。肥つた膝も埋る程、彈力をもつてふくれ上つてゐる、紫地に大輪の白牡丹の浮上つてゐる唐縮緬の座蒲團は、暖かく柔かかつた。何時も子供の爲めに心を盡して呉れる母親を想つて、三田は暫時うつとりとした。

六疊の室には形ばかりの床の間もあつて、明治天皇の教育勅語の石版刷のやつが、表裝をして掛けてあつた。壁も襖も疊も八疊に比べては新しく、おまけに東と南がすつかり硝子の嵌つた障子になつてゐるので、晴々した氣持になつた。次の間の三疊も寢しかつた。三田は、生活費の足にもなり、小遣の源でもある小說を、その晩から起稿し始めた。

滿足に眠つた朝は晴れてゐた。雨戸をあけると室の中には朝日が射して來た。天滿

橋のある方の阪下の町の家々の屋根が、光を反映して光つてゐた。日の目も見ない八疊との相違は大したもので、たつた五圓違ひとは思はれなかつた。火鉢にかけた鐵瓶の湯のたぎる音も、近所の屋根や物干で鳴きかはす雀の聲も新鮮に感じられた。

窓際に立つて見下ろすと、全く餘地のないやうに思はれる下宿の裏庭にも、見上げる程の柳や枇杷の木があつて、今は寂しい梢だが、枝は目の前にも延びて來てゐた。境界の黑塀の向ふに、隣の宿屋——御旅館雪本の二階があからさまに見えた。同じやうに手拭をかぶり、お尻をはしよつた女中が二人、そこの縁側を四這になつて拭いてゐた。

不圖その一人が立上つて、此方を向いて莞爾りした。お早うといふ意味の笑らしかつた。

三田がどぎまぎして、挨拶を返すべきか、返すべきでないかと迷つてゐると、

「あ、違ごてるわ。」

先方もまごついた樣子で、もう一人の朋輩をかへりみていふ言葉が聞えた。三田は顏をあらぬ方に向けて、何の氣も付かないやうな振をした。

「何時もの人と違ふたわ。」

「あのえゝ男はんは居やはれへんのか。」

はしたない口をきいて、若い女中は聞えよがしに笑つた。

四の一

室が改まつて、其處におちついて來ると、三田の生活は段々機械的になつて來た。朝は別段早くもなく、さりとて勤務の時間に遲れるやうな事も無く、起きると直ぐに向側の湯屋に出かけた。若い娘が平氣な顏をして、裸體の男を番臺から見下してゐるのは面はゆかつたが、同宿の貯蓄銀行員などが、湯船から上つたばかりの裸身から湯氣をたてながら、近々と顏を合せて挨拶したり、冗談を云つたりしてゐるのを見ると、

事毎に平氣な人間が羨ましくもあり、又恥知らずのやうで擯斥したくもあつた。婆さんは寢坊なので、朝の食事は乾度お梅のお給仕だつた。口をきくのがうるさいので、膝の上に擴げた新聞を讀みながら、大概一膳飯で濟んでしまつた。手早く洋服に着換へると、恰度出勤の時間になるのだつた。

會社の仕事は一層機械的だつた。歐羅巴の戰爭のおかげで物價は素晴らしく暴騰したので、他では大概割增手當を出したが、役人上りの社長は、何の思ひやりも無く、そのくせ人は金錢づくで使ふのは下々の下で、眞情を以て使はなければならないと云ひながら、實際は無闇にやかましい命令ばかり下してこき使ふので、東京の方もさうだつたが、支店の者もおしなべて氣をくさらしてしまひ、たゞ徒らに慣習的に事務を取扱つてゐるばかりだつた。

日の暮には、先を爭つて歸る社員にまじつて、三田もいそ〳〵往來に出る。眞直ぐ下宿に歸れば、金露一銚子を傾け、不味いお菜にへきえきしながらも、膝の上に夕刊

を擴げて、默々として一膳御飯を濟ませてしまふ。婆さんのお給仕にぶつかると、相手のおしやべりに壓倒されて、否でも應でも口を開かなければならなくされてしまふが、そんな時にも、三田は短いうけこたへをするばかりで、流石の婆さんも張合ひがぬけて、言葉數は少くなるのであつた。

下宿のお菜に堪へられなくなると、一度同僚に連れて行かれた天神橋の蜻安の味を覺えて、大鍋の前に立はだかり、吉長のこつぷをひかへて、關東煮を晩飯のかはりにしてしまふ事もあつた。何れにしても食事が濟むと、母のなさけの座蒲團に坐つて机にむかひ、夜が更けて十二時一時になる迄、本を讀むか書きものをした。

自分の事は自分でするといふ精神が强かつたばかりでなく、他人との交渉を避ける爲めにも、彼は一度も手を叩いて人を呼ぶ事をしなかつた。下宿の者は「離室のだんまりさん」などゝ蔭口をきくやうになつた。

「御用があつたらお手を鳴らしとくなはれ、貴方さんのやうに手を叩かんお客さん初

めてだつせ。」

お梅はさういふ意味の言葉を幾度となく繰返した。用事が無ければ忙しくなくていゝだらうと三田は思ふのだつたが、相手にして見ると、あんまり用事が無さ過るので、氣を惡くしてゐるのではないかと心配するのだつた。

「だつて用事が無いんだもの。」

三田はさう答へる外には爲方がなかつた。

斯ういふ毎日の生活を時折脅かすものは訪問客だつた。

四の二

しげしげ來るのは田原一人だつた。市内の營業所から電話がかゝつて、三田の在宿を確めると、間も無く自動車は城西館に横づけになる。

「三田公ゐますか。」

門をくぐる時分に大きな聲をかけて、靴の踵を敷石に響かせ、お馴染になつたお梅に冗談を云ひながら、家中に聞える高笑で上つて來る。自動車に乘つて來る丈でも十分下宿の者の尊敬に値ひするので、田原が來たといふと、婆さん迄も飛んで出て迎へるのであつた。

「いかん、いかん。婆さんは眞平だ。お梅ちやんに限るよ。」

本來ひどい差しがりやで、冗舌して演説口調になる時でなければ、まともの口はきけない質だから、わざと世馴れたらしい冗談でも云はなくてはゐたゝまれないのである。

「そないに嫌はいでもよろしいが。」

「かなはん、かなはん。」

一際大きな聲を立てゝ頭をかゝへて逃げ出すところが、婆さんには又氣に入るのだつた。

「あの社長さんは、貴方と違うて氣さくな方だんな。」

田原がはしやげばはしやぐ程、苦り切つてしまふ三田にあてつけがましく、感嘆して見せる事もあつた。

「あゝして始終自動車に乘つて歩いたら、偉いものいりだつしやろ。」

「なあに、會社の車だから平氣で乘廻すのさ。」

三田の云ふ事はほんとでも、婆さんはさうは取らなかつた。此の變物が人樣の事にけちをつけくさると考へるばかりだつた。

「中等學校から大學校一緒に卒業しても、一方は社長さんで、片方は未だ獨身で下宿してはる。働きも働きやろが、これが人の運といふもんやろなあ。」

婆さんは外の者にも話してきかせた。

三田と差向ひになると、婆さんにもお梅にもさつぱり解らない種類の話を、田原は夢中になつて話した。雜駁な智識ではあつたが、多方面の本を讀んでゐる三田をつか

まへて、事業組織の根本問題から、彼が最も興味を持つ社員職工の待遇方法などを、自分自身の意見も述べ、相手の說もきいて論じ立てる。社會主義の思想を多く受入れた學校時代の頭腦で、營利一方の他の重役や株主を向ふに廻して、彼は其の頭理想と實際の板挾みになりかけてゐた。

田原の矛盾を指摘するのが三田の役廻りだつた。友達の一身を思ふと、それが自分の責任のやうにも感じられた。三田に云はせると、田原の腦裡にいゝ事として描かれてゐるのは、殆ど全部が或る社會的變革が行はれた後の世の中か、又はさういふ世の中を理想として描く者の腦裡に於てのみ生々として存在するので、假之學者の議論或は煽動者の主張としては嘘でないが、現在の經濟組織の下に於ては直ちに行はれ難い事である。若しも田原が理想の追及に一身を任せるならば、先づ第一に事業を捨てて街頭に立つ外は無い。その極端を避けて、現在の組織のまゝで、事業の改善を行はうとするのならば、全力を擧げて事業に沒頭すべきである。言葉を換ていへば、儲けて

散じる以外の何ものでもない。

「兎に角儲けるのさ。お天氣の挨拶の變りに、何ぞぼろい事おまへんかと云ふ大阪はその方の檜舞臺だ。儲けよ、さらば與へられんさ。」

新設會社の弱味として、先づ良好な資産狀態を基きあげなければ、待遇の改善も思ふには任せない筈であつた。

「そいつが俺には出來ないんだ。」

「それが出來なければ、結局駄々をこねてゐるに過ぎないぢやないか。ダダイズムといふ奴さ。」

何時も極まつて饂飩とおまんを喰べながら、初冬の夜の終電車の頃迄しやべつてゐた。下宿では、田原の事を社長さんとも呼び、饂飩のお客さんとも呼び、饂飩の社長さんとも呼んだ。

四の三

日曜の朝であつた。玄關に訪ふ人の聲に、廊下の掃除をしてゐたお梅が出て見ると、洋服の男が立つてゐて、

「樟さんゐませんか。」

と云つて名刺を出したのを見ると、新聞記者だつた。

「樟さん。そんな人はゐてはれしまへん。」

「ゐない？　ゐない筈はないがなあ。樟喬太郎つていふ小説家で、つい近頃東京から來たんだ。君の所にゐると聞いて來たんだが。」

「へえ、さうだつか。そんなら一寸尋ねて見まつさ。」

そんな名前の人はゐないとわかつてはゐても、何となく不安になつて帳場に聞きに行つたが、亭主も婆さんも知らないと答へた。

「お隣やないか云ふてみなはれ。」

婆さんに注意されて、お梅は又玄關に出た。

「尋ねて見ましたけれどな、皆が知らん云ひますのんで、お隣も雪本いふ宿屋だんが、ひょつとして向ふさんではおまへんか。」

「左樣かなあ、確に此處と聞いて來たんだが。」

新聞記者は思ひきり惡く、衣嚢から手帖を出して、手控の頁を探した。

其の時二階から手拭と石鹸箱を手にして、風呂にゆく三田が下りて來た。

「そら此處に書いてあるだらう。城西館權堂ろく方樟喬太郎。」

「へえ。」

お梅は引込まれてその手帖をのぞいたが、さういふ名前の止宿人はゐないので、どうとも返事が出來なかつた。三田はすましてゞ傍を通り抜けて湯屋に出て行つた。

「ゐないとあれば爲方が無い。や、失敬しました。」

一度お梅の手に渡つた名刺を取戻して、記者は未練らしく其處いらを見廻しながら歸つた。

見送り果て、一たん置いた帶を取上げ、再び掃除にかゝらうとすると、今の記者と門前で擦違つた位しか間を置かずに、又一人玄關に人が來た。

「御免なさい。三田先生はお出でになりませんか。」

鳥打帽子をかぶり、毛糸の襟卷を首に卷き、セルの袴を穿いた若い男だつた。

「どなただつか。」

「三田先生です。」

「あゝ三田さんだつか。」

先生と云ふ思ひがけない言葉を、お梅の耳は疑つたのであつた。

「私は草間といふ者ですが、先生にお目にかゝつてお願し度い事がありますので……」

「三田さんだしたら今先刻お風呂屋に行きはりました。」

「直きにお歸りになりませうか。」

「はあ、向ひだすよつてな。」

若者は別段遠慮もしないで、お梅に導かれて離室の三田の室に通つた。

「三田さんの事を先生々々いふてるし。」

帳場に下りて來たお梅は、目をまるくしてみんなに話した。

四の四

間もなく三田は茹つた顏をして歸つて來た。てつきり新聞記者に違ひ無いと思つた男が、自分の筆名を言ひ立てゝ、お梅と話をしてゐたが、あのまゝわからずに歸つたらうか——風呂の中でも其の事が氣にかゝつて、故意と長湯をしたのであつた。

「三田さん、お客さん來て待つてはりまつせ。」

梯子段を上つてゆく後から、お梅が追ひかけて來て聲をかけた。

「ちえつ、爲樣がないな。新聞記者は大嫌ひだ。」

何故人の留守に、室になんか通すのだと不滿に思つて、つゝ咎めるやうな口調になつた。

「あゝ、あの方もしんぶんやはんだつか。」

「さうさ、あのきよと〳〵した目つきと、おちつきの無い態度で直き知れるぢやないか。」

二人の話は全くかけ違つてゐたが、お互に氣がつかなかつた。お梅は先刻何とかいふ人を訊ねて來たのは新聞記者だつたが、今度のはたゞの書生だと思つてゐた。三田は先刻湯に行く時玄關で見た男が、留守中侵入してゐるのだとばかり考へてゐた。

襖をあけて室に入ると、思ひもかけない若者が、今迄自墮落にしてゐたのを、狼狽して整然と坐り直したところだつた。

「先生でゐらつしやいますか。」

その男は叮嚀に頭をさげた。

「私は三田です。」

先生と呼ばれた丈で客の來意はわかつた。

「私は平生先生の御作を拜見してゐますもので……」

若者のいふ所によると、彼は今大阪の或る商店に勤めて、かつ〳〵生活してゐるが將來文學を以て身を立て、名を成し度いと云ふのであつた。

「大矢北海は先生も御存じでせうが、私の同郷の者です。」

「知りません。」

三田は不機嫌な顏つきで答へた。

大矢某といふのは、聖書に材料を取つた大部の小說を書いて、忽ち百版を重ねたといふ作家だつた。しかも其の一版といふのは百冊を以て數へるので、此の商賣上手はうまうま名を成したといふ不愉快な噂をきかされてゐた。

兎に角世界に今迄無かつたものださうですな。」

若者は、當然文壇の誰でも知つてると思つた同郷の先輩を、知らないと云はれたのが心外さうだつた。

「そりやあ無いかもしれませんね。聖書は既に完成した藝術品だから、單にそれを今風に書直すといふ事は、雜文家の仕事で藝術家のやる事ではないでせう。その意味で世界に唯一のものかもしれません。しかし事實、あゝいふものは外國には澤山あるんぢやないんですか。一體私は、耶蘇だとか親鸞だとかいふ偉い人を喰物にするのは嫌ひです。」

「そりやあ先生とは作風も違ひますし、思想的傾向も別々ですから爲方がありませんが……」

若者は矢張り不滿さうに見えた。

四の五

「實は私も約一年間かゝつて書上げた長編がありますので、これを出版したら如何かと思つてゐます。

膝のわきに置いてあつた風呂敷包をほどいて、分厚な原稿を三田の前に押して寄越した。取上げて見ると、「或る泥濘にうごめく人々」といふ題で、一千枚に餘るものであつた。

「或る泥濘にうごめく人々ついふ此の「或る」は、泥濘にかゝるのですか、人々の方にかゝるんですか。」

「さあ、そんな細かい事は考へて見ませんでしたが、それはどつちでも差支へ無いと思ひます。兎に角私は此社會を泥濘と見て、立派な天分を持ちながら、生活の爲につまらん仕事をしてゐる青年の心理を描いたのです。自叙傳と見てもいゝものなんです。」

自分の藝術に對する自信を語るに至つて、此の青年作家は目に立つて亢奮し、雄辯になつた。

これ迄に澤山の短編小說を書き習ひ、新聞や雜誌の懸賞に應じて選に入つた事もあるといふ。つい近頃迄郷里の新聞以外には名の知られてゐなかつた大矢北海が、志を立てゝ東京に出ると、間もなく「聖書物語」であてゝ、一躍して原稿成金になつたのに刺戟され、東京に出さへすれば、忽ち文壇の流行兒になれるやうに考へてゐるのだつた。就ては此の長編の出版を引受けさうな、本屋に紹介して呉れといふのが要件だつた。

三田はその作品がいゝものか下らないものかは知らないが、近頃の傾向として、質の良否は問題にならずに分量でおどかさうとし、讀者の方も無批判で、本屋の誇大な廣告に引摺られ、眞面目に藝術に精進する者の愈々少くなるのが心外で堪らなかつたから、此の若者がひたむきに、有名になるといふ事ばかりに夢中になつてゐる樣子が

苦々しく思はれた。彼は腕を組んで、嘆息するやうな心持で、「或る泥濘にうごめく人々」を見て默した。

折柄お梅がばた〳〵駈けて來て、

「三田さん。先刻貴方がお風呂へ行きはる時、玄關にゐた人なあ、あれしんぶんやはんやさうなが、樟さんたらいふ人を訊ねて來やはつたよつて、そんな人ゐてはれへん云うて歸つて貰うたら、今又見えてなあ、樟さんいふのは貴方の事や云うてはりまつせ。あんた樟さん云ひまんのか。」

疑はしい目つきで三田の顏を見詰めながら、息せわしく云ふのだつた。

「ちえつ、爲樣がないなあ。まあ此處に通して呉れ給へ。」

「へえ、さうだつか。樟さんいひまんのんか。」

お梅はつまゝれたやうな樣子でつぶやいた。

「やあ、失敬します。」

高調子で挨拶しながら、直に新聞記者が入つて來た。帽子をとり、襟卷をとり、外套を脱いで、名刺を出したが、凝然と三田の顏を見て、

「何んだ貴方でしたか。いかんですねえ。非道いぢやないですか。先刻僕が御本名をついきいて來なかつた爲めに、へまをやつたのを、知つて知らん面をして、すまして側を通つて行つたのは人が悪いですな。」

不愉快さうな、その癖それを愛嬌にもしやうとする笑聲を立てた。

「私は新聞に出される事が大嫌ひなんです。その爲めには非道い迷惑をしてゐます。でたらめの浮名を立てられた汚名は未だに消えません。」

三田は恰も歐羅巴から歸朝した時、同船の或る若い未亡人との、ありもしない關係を捏造して書かれた事を忘れなかつた。

その婦人の夫は倫敦に駐在する役人だつたが、精神に異常を呈して自及した。未亡人は遺骨を守つて故郷へ歸るところだつた。新派の歌を詠む人で、自ら文學の趣味が二箇月に近い航海の間、他の乘客よりも三田と親しくさせた事は疑ひもなかつたが、どうした事の間違ひか、今でも原因はわからないが、或る新聞の三面に、二人の間にたゞならぬ關係があつて、その骨になつた人の死因も、妻の不貞を憤つた爲めらしいといふ事が書かれたのである。幾多の新聞が更に之を形式を變へて轉載した事はいふ迄も無い。其の當時取消を申込み、その後も折につけては口に筆に、無責任なる新聞記事を罵り、人もあらうに夫の死を嘆き悲しむ人の上に、かゝる曲筆を振ふ罪惡を指摘しばしたものゝ、いつたん人々を驚かした好奇的の印象は、遂に消す術もなく、今でも世間は彼を見る時、あらぬ疑ひに目をかゞやかすのだつた。

「私は新聞の効果よりも、寧ろその害惡を著しいと認めるものです。」

三田の口調はどうしても强くならざるを得なかつた。

「それは全く異例の出來事です。僕の方の社ではそんな出所の分らない記事なんか出しません。」

「ところが、それが貴方の方の新聞に出たんですからね。」

「ハ、ハ、ハ、……こいつはしまつた。」

記者は寧ろ面白さうに笑つた。

「まあそれはそれとしてですな、實は僕の方の社で「一日一人」といふ欄を設けて、既に十數日續いてゐます。寫眞を出して、あらゆる方面の名士の感想を伺つて書くのですが、大阪は實業家は澤山ゐますけれど、他の方面の人間は少いので困つてゐたのです。ところが折よく貴方が來られたといふので、社の方から指圖されて伺つたんです。長い事は入りませんから、何か感想をきかして貰ひ度いですね。」

「駄目ですよ。私は新聞社の人には逢はない事にきめてゐるのですから。」

「そんな事をいふとお爲めになりませんせハハ、ハ、ハ、」

「爲めにならなくても爲方がない。既にこれ以上の不爲めはないといふ目にあはされてゐるんだから。」

三田は苦り切つて、堅く唇を結んだ。

「それがいかん。それがいかんのです。互に肱をとつて語る態度で行けば、間違つた事なんか書かれやしない。吾々に逢はないなんて、腹をきめてるのは間違ひのもとですよ。」

記者は又體をゆすつて高笑ひした。

長編小說の作者は、物珍しい光景を熱心に見守つてゐたが、自分が其の場にゐるのが惡いのではないかとも考へられて、先刻からもぢもぢしてゐたが、話が一寸途絕えたので、

「先生、私は近日又伺はせて頂きませうか。」

と云つて見た。

「ええさうして下さい。原稿は拜見して置きますから。」

引止めるかと思つた三田は、待つてゐたやうに、すつぱり返事をした。

「ではお預けして行きますから御覽下さい。」

若者は原稿を包んで來た風呂敷をたゝんで懷に入れて歸つた。

四の七

「今の若い人はお弟子ですか。」

「いゝえ、初めて逢つた人です。此の原稿の作者ですがね。」

「はゝあ「或る泥濘にうごめく人々」か。」

素早く手帖の端に書きとめて、

「傑作ですか。」

「どうですかしら、まだ讀んで見ないのでわかりませんが、當人は傑作だと確信して

ある樣子でした。」

「成程。つまり新進作家の力作ですな。」

記者は煙草に火をつけて深く吸つた。

「さて本論に入つてですね、先づ大阪の御感想を伺ひませうか。」

手帖を開いて、短い鉛筆の尖頭を嘗めた。

「大阪の感想と云つて、まだ來たばかりで何にもありません。下宿の不自由に惱んでゐるばかりです。」

「つまり東京に奥さんを殘して來た寂寞ですか。」

「さうぢやありませんよ。私は未だ獨身なんです。」

「はゝあ。さうですか。それではと、如何でせう、大阪婦人に對する御感想は。」

「困りますね、大阪の婦人て、たつた一度宴會で藝者を見たばかりで、奥さんもお嬢さんも知らないんですから、別段の感想のあるわけがありませんよ。」

「いかんなあ、まるで書く事がありやしない。」

一膝乘出して、手帖で疊を叩いた。

「どうです、大阪婦人と結婚する氣はありませんか。」

「そんな突飛な質問では尙更返事が出來やしない。いゝ人でさへあれば東京も大阪も區別は無いぢやありませんか。」

「爲樣がないなあ。まるで材料を吳れないんだもの。」

舌うちして、

「では寫眞丈借りて行きませう。」

「寫眞は大嫌ひで、此の處十年ばかり寫した事もありません。」

「そんなら社の寫眞班を寄越しませう。」

「そいつは許して下さい。私は全く寫鏡の前に立つ時の、取りすました氣持が嫌ひなんです。」

「ちえつ、爲樣がないな。」

もう一度舌うちして、何も書き留める事の出來なかつた手帖を衣嚢にをさめて、

「や、どうも失敬しました。何れ又何か伺ひに來ます。」

頭を下げて立上つた。

記者をかへした三田は、まんまと擊退したやうな滿足を感じてほつとした。

「三田さん、貴方小説の先生だつか。」

好奇心に魂を奪はれたやうなお梅は、闇の上にべつたり坐つて、眞正面から三田の顏をしげ〳〵見守つた。

「さうは見えないかい。」

「見えしめへんなあ。貴方新聞に書きはりまんの、「珊瑚夫人」やら「黃菊白菊」みなは面白うおましたてなあ。お芝居にもなつたさうでおまんな。」

「駄目だよ。僕のはあんな面白いんぢやないんだ。あゝあ、新聞記者にとつつかまつて氣がくさ〳〵してしまつた。散歩でもして來ようかな。」

相手の質問がうるささうに、三田は欠伸をしながら立上つて、壁にかゝつてゐる帽子をひつつかんで出て行つた。

四の八

それから二日目の夕方だつた。三田が會社から歸つて來ると、玄關で護謨毬をついて遊んでゐた藪睨の女の子が、

「三田さん、おかへり。」

と妙な節をつけて叫びながら奥にかけ込んだ。

「三田さん、貴方の事新聞に出てまつせ。」

婆さんの嗄れた聲が聞えた。帳場の暗い電燈の下で、家中の者に酒屋のお女房さんもまじつて、額を集めて讀んでゐた。

「新聞に出たる。新聞に出たる。」

子供はそれを毬唄にして、飛上り跳上る護謨毬の頭を叩いてうたつた。

三田は何の返事もしずに二階に上つてしまつたが、後からお梅がついて來て、着物を着換へやうとする暇も與へず、夕刊を目の前に突つけるのであつた。

三面の上の方の「一日一人」といふ欄で、小説家樟喬太郎氏と大きい活字の横に「是非とも大阪の女を妻にし度い」と小標題を置いてあるのが、先づ第一に三田の眉をひそませた。

旅館城西館の奥座敷、紫檀の机を傍にして悠然と金口を吹かしながら、こころよく記者を迎へたのは、本名三田某では誰も知るまいが、東都文壇の一方に將たる小説家樟喬太郎氏である。氏は最近勤務先なる某會社の支店詰として來阪せられたのであるが、藝術家に特有なる鋭い感受性を利用して、先づ大阪の第一印象を次の如く語られた。

「大阪の誇りはお城の石垣と天王寺の塔に限らない、商業の中心は完全に東京から此地に移つた。經濟既に然り、やがて一切の文化が大阪を中心として花を開き實を結ぶ事は疑ひも無い。殊に一國の文明の尺度である新聞事業の如きは東京は足下にも及ばなくなつた。發達したる市民生活の表象としては公會堂がある。今や工事中の市役所が落成する曉には東京は益々顔色が無くなるであらう。」氏は如才なく大阪の近時の發展の驚く可きものあるを説いたが、記者は經濟の大阪に就ては他に聽く人甚だ多ければ藝術家としての觀察を望むといへば「ハハハハ藝術家としての觀察ですか」と一膝乗出して「先づ人生の樂みは酒と女といふが藝術家にとつては殊に然りです。その方面から觀ても大阪は又日本一でせう。いや世界一と云つてもいゝかもしれません。酒の話は暫らく措き、大阪の女の美しいのにはつくづく感嘆しました。令夫人も令嬢も、お家内はんも御寮はんも娘はんも、藝者も仲居も女給も其の風姿こそ各異なれ、何れも魂を奪はなければ承知しない美しさである。かゝる

女性を有する大阪の男子は羨望に堪へません。私も今こそ宿屋住居をしてゐますが、近き將來には良妻を迎へてスウキート・ホームを形造らなければならないのです。幸に美しい大阪婦人を妻に持つ事が出來れば此の上の喜悅はないと思ひます。

アハハハハ」と呵々大笑したが「しかし美しい大阪婦人も、思想的には如何ですかね。」と藝術家らしい皮肉を浴びせたり。

氏は大阪滯在中文藝趣味の鼓吹に努力せん事を誓ひたるが、たまたま席上氏に私淑せる青年文士草間某あり、「或る泥濘にうごめく人々」と題する一千枚の力作をもたらして氏の批評を求めつゝありしが、恐らくは沈滯せる文壇にセンセエションを引起すべき傑作ならんとの事にて、氏は此の秘藏の門弟の爲めに自ら序文を草し近く出版の事に取運ぶ可しといふ。

尙近影一葉を求めたれども「それは美しい新妻を迎へた上の事にしませう」と巧みに避けて笑にまぎらしたり。

四の九

「馬鹿ッ。」

讀み終つた新聞を、滅茶々々にまるめて疊の上に叩きつけた。

お梅は、期待したとはうつてかはつて機嫌の惡い三田の樣子に驚いたが、

「上手に書いておまんがな。」

ととりなし顏で云ひながら、その新聞を拾つて叮嚀に皺を延ばした。

三田は机に向つて原稿紙を開いた。卑陋なる新聞記者の勝手に揑造した記事に對して、訂正を申込むと同時に、思ふさま罵つてやり度かつた。そのくせ、許し難い相手の態度を憤る胸には動悸さへ高まつて、文字は思ふ通りにつゞれなかつた。書きかけては破り、書きかけては破る紙屑が、見る間に竹の屑籠にいつぱいになつてしまつた。

「えらいお待遠さん。」

婆さんがお膳を運んで來た。ちえつ、いやな奴が來やあがつたなと思つて、三田は又書きかけの原稿紙を手荒く裂いた。

「さ、ひとつお上り。貴方のおかげで城西館も新聞に出ました。」

婆さんはお銚子を取上げて、近々と膝を乘出した。

「お會社にお勸めや云はるよつて、小說書く方とは思ひませなんだが、初手から普通のお客さんとはお人柄が違ふたると、私は睨んでゐましたのや。」

いかにも新聞に名の出る人間は偉く、その人のおかげで自分の家の名も活字に組入れられたのが光榮だといふやうな態度は、三田を一層不愉快にした。彼は默つて、つがれるまゝに酒を飲んだ。

「どんな小說書かはるのや知りめへんけれど、貴方私の事書いたら面白いのんが出來まつせ。柄が大きうおましたさかい、十三の年にな、おろくやん嫁さんに來てくれんのやつたら死んだる云ふて人を困らせた息子さんもおましてんねせ。いゝえ、ほんまだつせ。そないむつかしい顏して見んでもよろしうおま。私かて若い時は、それはそれは綺麗におましてんオアハ、、、、、、」

一人ではしやいで、愛想をいはうとすればするほど三田の額の不機嫌皺は深くなつた。

「樟先生。ひとつ頂かせて貰ひましよか。」

酒ッくらひの婆さんは、目の前で飲まれては我慢の出來ない方で、見榮も外聞もなく大きな手を差出した。三田は默つて盃をその上に置いた。

「濟んまへんが、ついでにお酌もして頂きましよか。若い男はんのお酌は又ひとしほやオアハハハハハ」

「よしませう。僕はお酌は嫌ひだ。お酌をされるのさへ好きでは無いんだから。」

「へえ、さよか。」

婆さんは多少てれたらしかつたが、まゝよといつた形で、

「そんなら手酌で頂きまつせ。」

とくとくと盃にみたして、仰向いて咽喉を鳴らして吸つた。

「おかへし。」

白けた舌を出して唇をなめ廻しながら返盃しやうとした。

「もう入らない。今日はこれから勉強するから。」

「へえ、もう上つてやおまへんの。えらい悪おましたなあ。」

「なあに、そんなんぢやないよ。酔拂つては勉強が身にならないからさ。」

「さうだつか。」

流石に婆さんも面白くない樣子だつたが、ふてぶてしくさげすみ笑ひを口尻に浮べて、

「そんなら私が頂きまつせ。」

といふかと思ふと、ついでは吹み、ついでは吹み、殘つた酒の最後の一雫迄もした

んでしまつた。

四の十

拜啓愈々御隆昌之段奉賀候陳者本日の貴紙夕刊所載「一日一人」なる一文は小生の談話筆記の體裁に候得共實は全く小生の存じも據らざる事柄のみにて甚だ迷惑仕候尤も一兩日前貴社員と稱する破れし靴下より踵をあらはしたる一人物來訪せられ頻に愚問を連發し當方非道く難澁致し候事有之候ひしが其節小生は明白に談話を御斷り致し貴紙載する所の數十行の如き卑陋なる言辭を弄したる事毛頭無之全く彼の破れし靴下より踵を現したる一人物の卑劣なる揑造に外ならず候爲念左に出たらめの條々列記可致候

一、「旅館城西館の奥座敷に紫檀の机」云々と有之候へども小生の下宿城西館の一室には檀紫の机など無之小生のは三越製の西洋栗まがひの安物に候

二、「悠然と金口を吹かし」と有之候得共小生は一切煙草は嗜まず候金口にはあらねど煙を吹きしは破れし靴下より踵をあらはしたる一人物自身に御座候

三、「こゝろよく記者を迎へ」と有之候得共小生は最初より頗るこゝろよからず存居候ひき

四、「大阪の誇りはお城の石垣と天王寺の塔に限らない」以下十數行所謂經濟の大阪觀は彼の破れし靴下より踵をあらはしたる手腕家の論說と存候小生の曾て一度も考へし事なき事に御座候殊に大阪の新聞をほめたる箇所有之候が實を申せば小生は東京の新聞が社會の木鐸なりなどゝ自負し居る間にいちはやく商賣主義を以て大儲をなし殆ど横暴なる勢力をふるへる大阪の新聞をこゝろよく思ひ居らざる者に御座候

五、「先づ人生の樂みは酒と女といふが」以下十數行所謂藝術家の觀察も亦破れし靴下より踵をあらはしたる一人物の觀察に相違無之候今にしておもへば大阪の婦人に對する感想及大阪婦人を妻となす意ありや否やの如き突飛極まる質問をうけし記憶有

之候が其時の小生の返事はそんな愚問には返答出來ずといふ一言にて候ひき是非共大阪の女を妻にしたいなどゝいふ言葉を口にする事は寧ろ小生の恥る所に候

六、破れし靴下より踵をあらはしたる一人物の手腕並々ならず被存候は最後に「美しい大阪婦人も思想的には如何ですかね」といふ一節にて此の巧妙なる揑造と手痛き諧謔には小生も殆ど敬服仕り候但し小生は大阪の婦人を別段美しいとは存じ不申貴紙上に常にあらはるゝ所謂名流婦人の自己の相貌の個性を沒却したる耳かくしや或は又歐羅巴の賣女の如き洋服姿には密に公憤を感じつゝあるものに有之候

七、草間氏に關する一節も事實相違に御座候同氏は小生の門人などには無之又その長編小說が果して傑作なりや否やも未だ一頁も讀まざる小生の知る限りには無之從而出版の事も存じ據らざる所に候

八、寫眞は嫌ひにて御斷り致候新妻を迎へて云々の如き不愉快なる事は申さず候

九、小生は性來ハハハハハハといふ如き高笑の出來ぬ生れつきに御座候乍末申添候

右の通に候間法の命ずる所に從ひ止むを得ざるに出る取消にあらずして小生の迷惑御諒察の上眞心を以て御訂正相成度切望仕候

四の十一

三田は新聞社へ宛た一文を書終ると、稍溜飲の下つた氣持もし、又その語氣の强いだけ、かへつて亢奮を增したやうでもあつた。狀袋に入れたのを懷にして、直ぐに郵便函に急いだ。

歸つて來ると、待構へてゝも居たやうに、玄關に亭主がゐて、

「おかげさまで私とこも新聞に出ましてな、みなが喜んで居ります。」

と平生の無口に似ず、揉手をしながら愛想笑ひをした。三田は何と返事をしていゝか困つてしまつて、厭な顏つきで二階に馳上つた。

その晩は机にむかつても、平靜な心持は歸つて來なかつた。本を讀む事も、物を書

く事も出來なかつた。半分はやけになつて、机の上にづつしりと置かれた「或る混濁にうごめく人々」を開いた。

五枚十枚讀むうちに、まるつきり省略を知らない煩瑣な書方が堪らなくなつて來て、到底一字一句を讀む根氣はなかつた。二枚三枚一時に飛ばしながら進行した。

結局その小說の內容、田舍の文學靑年が都會に出て成功する迄に、經驗する生活と性慾との惱みを描いたもので、工場に働く場面もあり、下宿の女中との情事の光景もあつた。投書家に普通の、自然主義全勢時代に幾つもあらはれた題材で、しかも當時流行の人道主義的感傷癖を多分に含むものである。至る所に出て來る人類の救濟といふやうな文字が、まるつきり無內容に用ひられてゐるのが堪らなかつた。作者の努力が些かも內部に向けられず、徒らに量に於て人を壓倒しやうとする野心にみちゝてゐるのが、その眞實の價値の乏しい丈著しく目立つのであつた。水平線以下の物で明日になつたら送りかへさうと思ひながら、三田はそれを枕頭にして眠つた。

翌朝起きて見ると、その分厚な原稿の上に一通の手紙が置いてある。外ならぬ「或る泥濘にうごめく人々」の作者から來たのだつた。

先生。僕は隨分感謝してゐます。今日の夕刊を讀んだ時の感激さを察して下さい。實は僕は先生の作品は好きでなかつたのです。耽美派といふんですか、享樂主義といふんですか、藝術至上主義といふんですか、何にしても吾々の胸にはぴつたり來ない或ものが隨分多過ぎます。しかし今は甘んじて門人と呼ばれませう。先生の序文も隨分難有いと思ひます。どうぞ僕の力作を世の中に出して、文壇を驚かして下さい。あゝ、僕の作物が本になるんだ。今は昂奮さが餘りはげしくて手紙なんか書けません。先生は此の心持をよくわかつて呉れると思ひます。明晩にもうかゞつて批評して貰ひます。それも隨分樂みです。

ほんとに亢奮して認めたらしい筆勢の手紙を見て三田は當惑した。此の頃の若い文人の鈍感から生れた言葉癖を、そのまゝ眞似した手紙の文言は不愉快だつたが、青年

の感激の僞りならぬ事は察しる迄もなかつた。本にする値うちは無いと云ひきかせなければほんとの親切ではないのだが、かう迄本人が喜ぶものなら、何處かの本屋に頼み込んで、無理にも出版させてやり度くもあつた。

何れにしても、かりそめの新聞記事が、人に及ぼす迷惑を考へると、三田は又憤りを新しくして、昨夜新聞社に宛て書いた文句の中に「破れし靴下より踵をあらはした一人物」などゝ云つたのは少々厭味だつたと、今朝は後悔もして居たのだが、そんな事は又忘れて、只管腹が立つて堪らなかつた。

四の十二

會社へ行くと、待構へてゐた同僚は肩を叩いて冷かすのだつた。

「三田君も會社では平の社員だが、あゝして見ると名士だね。」

「どうです。大阪の女がお氣に召したさうですが、いゝのが見つかりましたか。」

口々に面白がつて話かけるので、三田は甚しく赤面しながら、

「冗談ぢやない、あれはみんな新聞記者の出たらめですよ。あんまり根も葉もない事を書いてるから、早速取消してやりました。」

いくら辯明しても、誰一人新聞の記事を疑ふ者はなかつた。三田は支店長の目付を殊に氣にしながら、机の上に背を曲げて、さも忙しさうに事務を執つた。

正午近くの事で、小使が辨當の注文を聞いて廻つてゐる處へ電話がかゝつて來た。

「三田さん、電話ですよ。」

給仕の大きな聲に席を立つて電話室に入ると、受話機を耳に當る間もなく、

「貴方は樟さんですか。僕は新聞社の野田です。此間下宿屋にお訪ねした野田です。」

といふのは忘れもしない彼の記者だつた。

「貴方は怪しからん手紙を社に寄越しましたね。あゝいふ事を云つていゝと思つてるんですか。あれでも紳士ですか。文學者のなすべき行爲ですか。人を侮辱してゐるぢ

やありませんか。」

「もし、もし、怪しからないのは貴方の方でせう。人が云ひもしない事を勝手にこしらへて書くのが怪しからないとは思ひませんか。取消して呉れなくては困ります。非常な迷惑です。」

「何ですつて、勝手にこしらへたとは何です。貴方が快活に話をせられんのが惡いのです。だから僕が注意したでせう、此方の質問に明かに返事をせんと爲にならんといふ事を。」

記者は明かに脅かす調子で一際聲が高くなつた。彼の言ひ分は、あゝいふ亂暴な取消要求の手紙を寄越されては社に對して申譯が無い。紳士としてあるまじき事だから撤回しろといふのだつた。

「第一失敬ぢやありませんか。破れし紙下云々は絶對に許せんです。藝術家にあるまじき事です。」

又同じ言葉を繰返して、あく迄も手紙を撤回しろといふ。三田も破れし靴下云々だけは言ひ過ぎた事を認めたが、記者の脅迫がましい調子は一層許し難く思はれた。

「どうです、おとなしく撤回しますか。新聞の惡口なんかいふと爲にならん事位わかつてるでせう。」

「撤回しろ撤回しろつて、君の方の揑造記事は如何するんです。それを先づ明かに揑造だと告白するのが順序でせう。」

「まだそんな事を云つてるんですか。わからんなあ……」

ヂヂヂヂ……と受話機が鳴つて、電話は混線してしまつた。

「もしもし、話中ですよ。」

さう云つても何も聞えなくなつてしまつた。ほつとして、ふだんは癖のたねになる電話の故障を、三田は心から感謝した。

四の十三

三田は仕事も何も手につかなかつた。電話をかけて來た新聞記者の口吻では、恐縮して取消すどころでは無く、かへつて仇をしさうに思はれる。それにつけても「破れし靴下」は少し書き過ぎたと後悔した。しかし、あゝいふ無責任を敢てする新聞を、たゞ無闇に怖がつて、勝手な眞似をさせて置くのは、此の社會を益々惡くする所以である。社會人の責任としても、飽迄も正しき事の爲めに闘はなければならない。構ふもんか、やつつけろときほつた時、

「三田さん、電話です。」

と又給仕が高い調子で呼んだ。

ちえつ、又新聞記者が執念深くかけて來やがつたんだなと思つて出ると、

「おい三田公か。」

と呼びかけた聲は田原だつた。

「なんだい彼の新聞の「一日一人」はほんきであんな事を喋つたのか。」

「馬鹿な、誰があんな事を喋るもんか。新聞記者のでたらめなんだ。二度の浮名さ。」

「さうだらう。さうだらうとは思つたがね、社の奴等が田原さんのお友達の面白い話が出てゐますつて見せて呉れたもんだからね。」

「實に困るよ。世間の奴は新聞は嘘を書くとは思つてゐないんだから。しかし手きびしい訂正を申込んでやつた。」

「さうか。そいつは面白いな。いや一寸聲だけでも聞かうと思つてかけたんだ。今晩うちに居るか。遊びに行くかもしれないせ。」

「あゝ待つてるよ。左樣なら。」

三田は初めて味方の聲を聞いた思ひがして嬉しかつた。丸の廣い大阪に、あの新聞の記事のでたらめである事を信じて呉れるのは、たつた一人の田原だと思つた。

その田原の遊びに來るのを樂しみにして、退出時間になると、誰よりも先に會社を飛出して、大急ぎで下宿に歸つた。

「三田さんお歸り。お客さん待つてはる。」

門口で遊んでゐた藪睨みの女の子が、手柄顔にいふのを聞き流して、田原が來て待つてゐるのだとばかり思つて室に入ると、火の氣の無い火鉢を前にして坐つてゐるのは「或る泥濘にうごめく人々」の作者だつた。

「先生。私は先生に逢はないではゐられなくなりました。必ずや感謝してゐます。あの長いものを、お忙しい中で讀んで下さつただけでも隨分有難いのに、出版の世話迄して下さるなんて、何とお禮を云つていゝかわかりません。」

此間とはうつて變つて、元氣よく雄辯に話すので、それがかへつて三田の立場を苦しくした。

「如何でせう。彼の作は現在の文壇に出しても羞しいものではないでせうか。出版し

て、澤山版を重ねる事が出來るものでせうか。」

「さあ、それはわかりませんね。版を重ねるのが必らずしもいゝ作品では無いのですから。若し版を重ねやうと思つたら、耶蘇か親鸞か良寛の事でも書けば屹度當りますよ。」

三田は苦々しい心持で答へた。

「しかし先生のやうに二重生活をしてゐる人は別ですけれど、全生活を擧げて作家たらうとするには、賣れる事も必要ではないでせうか。私は、もう僅ばかりの月給をとつて、心にもない仕事をして居る事に堪へられないんです。」

「二重生活？二重生活つていふのは、そんな外面的の問題ではないでせう。たとへ筆一本で生活してゐても、人氣取り專一、金儲專一の通俗小說なんか書いて居れば、それこそ二重生活でせう。藝術家としての態度が眞摯なら、會社で月給を貰はうが、工場で日給を取らうが決して二重生活ではない。第一貴方が作家として飯が喰へると思

ふのが間違ひですよ。」

自分の態度に觸れて來たので、おもはず知らずむきになつて、三田はおかげで先刻から言はうと思ふ本筋に入る事が出來た。

四の十四

「貴方の作品は拜見するにはしましたが、正直のところ私には價値を認める事が出來ませんでした。實は早速郵便でおかへししやうと思つてゐたのです。」

相手は全く豫想外の言葉に驚いて、三田の唇から出る言葉を見守るやうに、ぼかんとして言ふ所を知らなかつた。

「では新聞に出てゐるのは嘘なんですか。傑作だといつたり、序文を添へて出版するといつたりしたのは。」

やうやくの事でそれだけ云つたが、既にその顏には失望と怒の色が現れて居た。

「私は傑作だとも出版するなんて事も云つた覺えはありません。此の間の新聞記者が勝手に揑造したんです。私は貴方が眞面目に創作をしやうと云ふのなら、出版の事なんか考へずに、もつと勉强しなければならないと思ふのです。」

三田は新聞の記事に對する辨解から、やがては「或る泥濘にうごめく人々」の批評にうつつて行つた。作者の觀察の幼稚な事、描寫のなつてゐない事、あまりに流行意識に捉はれ過ぎてゐる事、獨創に乏しい事、――さうしてそれだけの內容ならば一千枚を費す必要はなく、五六十枚で書ける事を諄々と說いて居るうちに、自ら同情も湧いて來て、此の文學雜誌にあやまられたる青年を憐れむ心さへ深くなつた。

「よくわかりました。先生と私とは全く傾向が違ふんだから爲方がありません。最初から見て貰ふ人を誤つたんです。」

相手の耳には三田の言葉は入らなかつた。有頂天になつて喜んだ事が、まるつきり空に等しかつたのを知ると、もう其座にはゐたたまれないらしかつた。

「では新聞に出てゐた貴方のお話は、全然嘘だとおつしやるんですね。」

そんな事があるものかと云ふやう樣子で、もう一度念を押した。

「貴方には御氣の毒ですが、あゝいふ事を書かれて、私も閉口してゐるのです。早速取消は出して置きましたけれど。」

「左樣でしたか。では其の原稿は頂いて歸りませう。大矢北海氏にでも賴んでどうかして貰ふ事にします。」

机の上の一千餘枚の小說を兩手で抱へて歸つて行く姿を、三田は氣の毒に思ひながら、そのくせ如何する事も出來なかつた。

「お邪魔しました。」

皮肉らしく、嘲るやうな調子でいふのを、玄關で見送つて、三田は寂しい氣持になつた。

「三田さん、お客さんお歸りだつか。ほしたら直きに御支度しまつさ。」

「今日は支度はいりませんよ。今に社長さんが來るさうだから。」

「あゝ又偏飩だつかオアハハハハハハ。」

婆さんに聲をかけられたのを切拔けて、上口にほうり込んである夕刊を拾ふと、逃げるやうに室に歸つた。

直ぐに開いて取消の記事を探したが、彼が豫期したやうなものはなく、殆ど誰も氣のつきさうもない欄外に、昨日の夕刊の「一日一人」中には多少事實相違の點がある と談話者から注意があつたといふ事が、三行ばかり書いてあつた。三田はその新聞を拳骨でなぐりつけた。

待つても待つても田原は來なかつた。空腹をかゝへて待ちあぐねた頃、急用が出來て來られないと、電話があつた。

四の十五

新聞に名前が出たといふ事は、俄かに城西館の尊敬を增す事になつた。たゞの會社員よりも、兎に角難しい仕事に思はれる小說家だといふ一事も、何と無く重きを加へた。

「離室の二階のお客さんの話なあ、新聞に出ましたせ。」

婆さんは他の客の座敷を觸れて廻つた。

「へえゝ、あのむつつりした人だらう。」

一番話の合ふ貯蓄銀行員の處では、お尻を据ゑて話込んでしまつた。

「貴方まだ見やはれしまへんの。こない書いたりまんが。」

帶の間から切拔いたのを取出して見せた。

「樟さんたらいふあざ名で、小說書きはるのやさうな。何時行つてもきちんと机に向うて勉强してはる。若いのに偉いもんや。」

ろくに口も利いては呉れない三田に對して、婆さんは全く好意を持たず、「離室のだ

んまりさん」と密かに稱してゐる位だつたが、急に自慢の種になつて來た。

「なんだと、是非とも大阪の女を妻にし度いだつてハ、、、、。養子ならいゝ口があるがなあ。」

「養子かて構めしめへんのやろ。先がえゝ家やつたらな。」

「えゝ家だとも、身代は五六十萬圓は確にある。もう此の上は金は入らん、養子は何もせんと遊んでゐてくれゝばそれでいゝといふのだ。結構な身分ぢやあないか。」

「へえゝ、そしてお子達はあれしまへんの。」

「娘が一人あるんだがね。顏立も惡くないんだが、どうしたものか生れつき跛なんだ。」

「それ位の事は辛棒せんならん。ありあまる身上やつたら自身働く事もいらんし、片足短いかつて嫁はんの役目つとまらんいふ事あれしまへんやろォアハハハハハ。」

二人が顏を合せれば、どうで其處に落ちて行く猥談になつて、互に聲が高くなつたが、

「此の話がうまくまとまれば、その家の身代の一割は貰へるんだ。五十萬圓として五萬圓だから惡くないやね。」

突然聲を低く落して、さも他人に聞かれては惡い話のやうに、眞實めかしていふのだつた。

「うまい話やなあ。五萬圓入つたら、半分は私が貰ひまつせ。」

「なあに外の人では無し、お婆ちやんと僕の間だ。お前の物は私の物、私の物は私の物さハ、、、、。」

「オアハ、、、、、。」

勝手な事を何時迄も喋つたが、婆さんは七分迄は眞面目で、その晩三田に養子の話をした。

財産は百萬圓で、一人娘は美人で、たゞ少しばかり片方の足が短いが、それとて大した事は無く、且つ當主のおやぢは病身であまり長生はしまいから、此の上いゝ口は

ありはしないと、さも自分が先方を承知しつくしてゐるやうな法螺を吹いた。

金露の盃を手にしたまゝ、苦い顔をしてゐた三田は、婆さんの言葉が終ると直ぐに、

「難有う。だが僕は大阪の女は嫌ひですよ。」

と自ら嘲るやうな口調で云つて、一層不機嫌な樣子を見せた。

「あんなわからん人もないもんや。自分から大阪の女子に限るいふさかい、人が親切にいふてるのに。」

婆さんはお膳を下げる途中で、貯蓄銀行員の室に寄つて、お鉢を抱へたまゝ一部始終を話して憤慨した。

五の一

十二月に入ると、折々雪まじりの雨が降つて、めつきり寒くなつた。一切の物價は底知らずに高くなるばかりで、下宿屋も又々一割の値上げをした。その上に炭などは

益々けちにするので、何處の室も寒さは骨身に沁みるのであつた。

離室の上下と、其中の六疊の客は變らなかつたが、往來に向いた二階の六疊にゐて病院通ひをして居た串本の網主は、春になつたら又出直すと云つて故郷に歸つてしまつた。その後には、東京から轉任になつて來た煙草專賣局に勤める夫婦者が入つた。隣の四疊半の方もふさがつて、醫科大學に通ふ學生がゐた。

「あの學生さんなあ、婦人科の先生になるのやいふて、えらい寫眞の入つたる本が仰山あるわ。」

婆さんは、なるたけ澤山の人に聞えるやうな聲で、專門の本に挿入してある種々な人體の部分の寫眞を、怪しからず面白いものとして樣に話した。

此間迄三田のゐた中の八疊も、二日三日、長くて一週間位の客の爲めに、絶えずふさがつてゐた。年末になつて、此商業地に掛金を集めに來る商賣人が多いのだつた。

朝も晩も、一時に方々で手が鳴つて、お梅は坐るひまもなく、こきつかはれた。片

方の座敷にやうやくお膳が出たと思ふと、

「おゝい、早う飯を喰はさんかあ。」

と外の室から怒鳴られる。

「お待遠さん。えらい濟んまへんな。手が足りまへんので。」

「手が足らなけりやあ、殖やせばいゝじやないか。」

がみ〳〵怒る聲が止まなかつた。

さういふ中で、一度も手も叩かず、まして聲を出して人を呼ぶ事もないのは三田だつた。時間のきまつて居る勤なので、朝たて込んで手間とれる時には、飯も喰はずに出て行く事もあつたが、そんな時でも手を叩いて催促する事もなかつた。

「三田さん、一寸待つとくれやす。今直きだつせ。」

靴の紐を結んで出て行く姿を見て、驚いてお梅が後から聲をかけたが、

「いゝよ、いゝよ。別段お腹も空いて居ないから。」

振向きもしないで云ひながら、さつさと往來に出てしまつた。

「どないしたらえゝのやろ。三田さん怒つて出て行かはつた。」

臺所に馳込んだお梅が泣聲で訴へたので、婆さんも亭主も女房さんも一大事とばかり吃驚して、その日の夕方三田の歸るのを待構へて、玄關に出迎へると、口々に謝まつたが、

「なあに、、ゝんですよ。忙しい時には爲方が無いさ。」

意外にも、ふだんは見せない笑顔で答へたので安心した。ほんとに怒つてはゐない樣子だつた。

同じ事が二度三度重なるうちに、三田の食膳の遲れるのはちつとも差支へのない事に思はれて來た。お梅が氣の毒がつて裏梯子を上らうとすると、

「三田さんやつたら後でよろしいが。」

とたしなめる事になつてしまつた。朝は喰べそこなふ事が多く、晩は一番後廻しで

おはちの底に冷く殘つた飯粒が、彼の口に入る事になつた。

五の二

三田は他人を煩はす事が嫌ひで、身の廻りの事は、出來るだけ自分でする性分だつた。その癖ひどく無器用なので、袖だたみにした着物の如きは、皺だらけになつてゐたが、それでも宿の者には頼まなかつた。各々がめい〳〵の爲す可き事は、催促されないでもするのがあたりまへだ。無闇に催促するのは失禮だといふやうな感情が、意識的ではなく、生れながらの心持として腹の底にあつた。

その上階級觀念や職業別に據る差別感を持つて居なかつたから、同宿の他の客などが下宿に對して要求する事は、殆んど念頭に浮ばなかつた。たゞ親切は欲しかつた。どうかして、もうちつと下宿の者が親切だつたらと、それは始終考へる事だつた。

一度も手を抑かず、一度も小言を云はない客に對して、下宿の方では別段感謝して

ゐなかつた。寧ろ馬鹿にした位だつた。

「あんな怖い顔してはつても、三田さん程おとなしい人も無いもんや。」

と、客の前には顔を出さない女房が、ほめたさうな口ぶりで云ふと、

「むこは變りもんやもん。」

婆さんは傍から一言の下に片づけてしまふのだつた。

或時は、斯ういふ出來事もあつた。

朝、婆さんが三田の室の掃除をしてゐると、塵拂の先が觸つて、机の上の陶器の西洋人形を叩き落した。おや、と見る拍子に、可愛らしい花賣娘の首がぽくりと折れてしまつた。流石の婆さんも狼狽てゝ、右の手に首を持ち、左の手に體を持つて、雙方から押つけて見たけれど、如何にもならなかつた。婆さんは先づその胴體を机の上の元の位置に立たせ、そつと首を上にのせて見た。折れ口はかくせなかつたけれど、左の眼は瞑を提げ、輕い足取りを見せた娘の、頭巾をかぶつた顔は靨を浮べて笑つてゐ

た。婆さんは一先づ安心して、足音を忍んでその室を出た。

自分の落度をかくしながら、その成行は矢張り氣にかゝるので、其の晩婆さんは三田のお膳を持つて行つて見た。

「お待遠さん。」

聲をかけながら襖をあけると、三田は机の前に坐つて、右の手に人形の首を持ち、左の手に身體を持つて、雙方から押つけてゐるところだつた。婆さんはぎよつとした。早くも氣が付いたなと思つたが、それよりも、先刻自分が塵拂にかけて首を折つた時即座に首と胴とをつながうとしたのと同じ形で、三田の工風してゐる姿が胸を打つた。誰しも同じ事をするものだなと、心密かに考へた。

「お人形さん、どうしやはりましたんな。」

婆さんは素知らぬ顔を差寄せてのぞき込んだ。

「首がとれてしまつた。可哀さうに。」

獨言のやうにいひながら、又しても婆さんが爲たと同じやうに、先づ胴體を何時もの位置に置き、その上に首をのせた。

「和蘭の旅の記念なんだが……」

何かいふのかと思つたら、それつきり默つてしまつた。

婆さんは長い年月の經驗で、かういふ場合には屹度誰のしわざかと訊かれるものと思つてゐた。勿論その時は知らないと答へるばかりだと腹はきめて居たが、相手が何も云はないのは全く意外だつた。

「餘程變つたるわ。」

感謝するよりも、くみし易い氣持の方が働いた。小説家なんて云つたつて、どんな小説家なんだかわかるものかと、新聞に記事の出た二三日とはうつて變つて、尊敬の念は日に日に薄らいでしまつた。

五の三

さういふ三田をうつちやらかしにして置くのは平氣だつたが、外のお客は、うつちやらかしては置けなかつた。手が鳴つて直ぐ行かないと、忽ち小言を喰はなければならなかつた。萬一婆さんに向つて小言でもいふものがあると、其の場は百方詫言を並べながら、帳場に下りて來ると盛んに毒口をきいたあげくが、弟夫婦に鉾先を向けるのだつた。

「かなはん、かなはん。毎日々々朝から晩迄叱られ通しや。給金は一文も貰わいで、こない働いてやつたらどないして呉れるのやろ。」

臺所の板の間で、晝飯の後始末をしてゐる二人を尻目に見ながら、煙草の煙を大きな鼻の穴からゆる〳〵吹いた。うつかり取りあつては損だと知つて居る弟夫婦は、婆さんには知れないやうに顔を見合せて、お互に默つてゐろといふ合圖をして、さも忙

しさうに眞小鉢に拭巾をかけてゐた。

その態度が婆さんには、はつきりわかつてゐた。

「うちもなあ、長い事女中も置かいで私とお梅が働いてやつてるのやが、此の節季の忙しない折に、二階を上つたり下りたり、あつちやでもこつちやでも何たら彼たら小言ばかり聞かされてゐたら、壽命が縮まるやうな氣がするわ。口入屋にでも頼んでゐるのやないのんか。」

自ばつくれたつて問詰めないでは置かないぞと、意地惡く高調子でたゝみかける。

えゝ又始めよつたぞと、女房の方に目くばせしながら、亭主は何とか返事をしなければならなくなつた。

「女中の事だつか。そんなら方々に頼んだるがな。」

「頼んであるいふて一人も來んのはどないしたのや。」

「せいてはゐるのやけれどなあ。」

どっせ喋りつこでは敵はないとあきらめて居るので、ふだんから無口なのが、殊更口數は少いのだつた。

「一體あんたたちが横着なんや。」

婆さんは力强く煙管をはたいて、唇をなめながらまくし立てた。第一自分は樂寢をして居られる筈なのが、見るに見兼て手傳つてやつてゐるのだが、それをいゝ事にして自分達は足腰を延ばしてゐる。お客が手を叩いても、立つて行くのは自分である。小言も聞いてやつてゐる。それなのにお梅にこそ相談づくで少しばかりの給金がはりの物をくれてはゐるが、自分には何の御禮もしないではないか。さういふ意味の事をしちくどく繰返して、合間々々には口汚く二人を罵つた。

「おらくさんもおらくさんや。子供ばかりこしらへてゐるのが能やないせ。宿屋のおかみさんやつたら、おかみさんらしう働いたらえゝやないか。」

「私かて働いてゐまんが。」

女房も默つてはゐられなくなつて、白眼勝の目で睨んだ。

「へえ、あんたが働いたる。働くいふのはな、畫日中聳はんと二人で炬燵に入つとる事やおまへんせ。お客さんの前に出て、お給仕もせんならんし、ねまのあげおろし、拭掃除な、毎日々々私のするのを見るがえゝわ。」

「あんたのは好きでしてはんね。頼まれもせえへんのに。」

「何や、頼まれもせんのにいふたな。そんな事がよう云へたもんや。阿呆らしい。私が助けてやらなんだら、此の家の商賣は出けるもんか。」

「あんたがする事なら私がしまつさ。」

女房は眞青な顔をしていひ切ると、手荒く汚れ水を流場にあけて、

「あゝあ、うるさい、うるさい。」

つぶやきながら、子供の寢かしてある奥の室に行つてしまつた。亭主もそれを見ると、いゝ機會にして裏の物置の方にかげをかくした。

「何ぬかす。阿呆。」

婆さんは癇癪聲をふりしぼつて、あらゆる憎しみを相手の後姿に投かけた。

五の四

いつたん喧嘩をすると、あく迄も忘れないのが婆さんの根性だつた。その晩は意地惡く長火鉢の側を離れず。何時もは好きで出たがる客の室へも、遂に顔を見せなかつた。お梅一人が泣き出しさうな顔をして立働いてゐるのを、忌々しく横目で見ながら晩酌の一本を、長い間がゝつてなめてゐた。

うちの者の食事も濟み、臺所の始末もどうにか片附くと、女房は子供を寢かしつけに奥へ引込んだが、亭主は帳場の電燈の下で帳面と首引きで算盤を彈いて居た。婆さんは矢張り火鉢の上にのしかゝるやうにして、滿腹の後の煙草をさもうまさうに吸つてゐた。

其處に、茶道具などを片附けて、お梅も二階から下りて來た。

「おゝしんど。」

べつたりお尻を下して、婆さんと差向ひに長火鉢に寄りかゝつて坐つた。

「今夜程忙しい事も珍しいな。一寸も休むひまあれへんのやもん。」

「ほんまにいな。ああ、ちつとあたんなあれ。」

婆さんは弟に聞えよがしにねぢらひながら、火箸を手にして炭をつぎたした。

「えらい寒なつたなあ。私の手、こないなつてしまうた。」

くりしした二側眼をみはつて、鞴の切れた兩手の甲を、婆さんの眼の前に突出した。

「ほんになあ。」

さもく同情したやうな聲を出しながら、婆さんは算盤を彈いてゐる弟の方に横目を走らせた。

「此の家でよう働くのはお前一人や。朝から晩迄つかひ通しにつかはれて、女中並の給金も呉れへんのやからかなはんなあ。」

さう迄云つても、顔も上げずに、わざと忙しく指さきを動かしてゐる相手を見ると愈々小面憎くかつた。

「なあ、私がせんどから度々云うたお梅の給金——給金いふ事もあれへんけど、まあ給金みたいなもんや。」

婆さんは弟に聲をかけて、又談判を始めるのだつた。

「あれなあ、もちよつとふやして貰はん事には、着るもん一枚こしらへる事も、ようせんで。雑用が高うなつたさかい、五圓や六圓のはしたがねは鼻紙の足しにもならへん。」

「さうぼんぼん云はんかてよろしい。その事やつたら今考へたるのや。」

たうたう默つては居られなくなつて、亭主も額に皺を寄せながら、うるさくて何も

手につきはしないといふ樣子を見せて、膝の上の算盤を音をさせて疊に置いた。

「考へたる、考へたるいふばかりで、何時になつたらえゝ考へが浮ぶのやわからん。私の方の分もせんどの話のやうにお正月から上げて貰ひまつせ。」

その方が本來婆さんの腹にこだはつて居る問題で、月々の取分を、増さなくてはならないとは、これ迄にも執拗く申出た話だつた。

「そやけどなあ、かゝりもえろなつたよつてんな。」

婆さんは物價騰貴を名にして收入をふやさうとし、亭主は同じ物價騰貴を楯にして逃れやうとするのだつた。

「かゝりがえらうなつたいうても、宿料も高うなつたやないか。以前として見ると下宿料は二倍も三倍も高うなつた。私の取分だけがふえんいふ道理がないやないか。」

「けれども物が高いさかい……」

亭主はたゝみかけて來る相手の口先に壓倒されて、同じ事を繰返す外に爲方がなか

つた。

「物が高かつたら又宿料をあげたらえゝやないか。此の景氣になんぼあげたかて何も苦情いふものあれへん。」

「さうはいふがなあ、つい此間あげたばつかりで、さうもいかんな。」

「それが商賣下手いひまんのや。あげる時にしつかりあげんからどもならん。」

婆さんは繰返して、自分の取分の增額を强要したが、亭主の方も口でこそ對等には相手になれないが、腹の中では馬鹿にして、何だ彼だといひながら、何時迄たつても埒があかなかつた。

長火鉢のふちに額をつけて、お梅は微かに鼻を鳴らしながら居睡りしてゐた。

五の五

二三日は婆さんもふてくされて、客の前には出なかつたが、もともと賴まれた仕事

ではなく、若夫婦は主人顏してのさばられるのを寧ろ迷惑に思つてゐるのに、當人が一人でじつと坐つてはゐられず、相手を見つけて喋るのが何よりといふ性分なので、何時となく又幅廣の薄黃色い顏を、到る處に押出すやうになつてしまつた。

桂庵から寄越した女中も來るには來たが、四五日居たばかりで逃げてしまつた。德島縣の田舍から出て來た其の女は、三田の室に給仕に來た時、

「此のうちは御飯をお腹いつぱい喰べさせてくれへんのんだつせ。」

とこぼしてゐた。その話によると、女中の御飯も婆さんがよそつて呉れて、おかはりをすると、

「よう喰べるなあ。」

と一度一度驚いた風をして見せるさうだつた。

「そんなにされては誰かて喰べられしまへんわ。」

眞白に肥つた大女は、泣面をして話したが、その翌日は居なくなつてしまつた。

「あんなしよむない女は居えへんかてよろし。お給金はたんとやる約束したが、當人は何一つ出來へんし、毎日々々茶碗や小皿を缺きよつた。」

忌々しさに堪へない口調で、婆さんは方々の室を一巡觸廻つた。

亭主は何時も臺所で、飯もたけば料理も一手でやつた。女房は、漸くまる一年の誕生日を迎へた頭の大き過る女の子が餘り丈夫で無いので、其の方にばかりかゝりあつて居た。その上甲斐々々しく體を働かせる性質ではなかつたし、近頃氣分が勝れないと云つて寢てゐる事も多かつたから、時折膳椀を清める位が仕事で、大概は奥の一室に引込んでゐた。

「甲斐性無しめが、又樂寢してくさる。」

婆さんは年中弟の嫁を罵つてゐた。

「なんし、おかみさんがかいもく働かん人やもんで、こんな婆がえつさえつさ上つたり下りたりせんなりまへん。」

客の前でも惡口をいひながら、その實方々の室で、面白さうな高笑をして居るのだつた。

客好きの婆さんも、三田に對しては好意が持てなかつた。むつつりして居て、酒落や輕口を云つても、解つたのか解らないのか、笑ひもしないのが忌々しかつた。

それから又女の客も、女連の客も嫌だつたから、夫婦者の所へは成可くお梅をやる事にしてゐた。

「御夫婦揃うてまま喰べたる前に、ちんと坐つてお給仕するのは、けなるうてかなはん。」

誰憚らずそんな事を云つて、結局繁々行くのは貯蓄銀行員の室だつた。其處からは時々花骨牌を切る音も聞え、銀行の同僚の集まつて居る時もあれば、表二階の醫學生と婆さんと三人の時もあつた。互に口やかましくいひ合ふ中で、高笑ひの聞える時は婆さんの勝つた時で、聞えない時は負けた時だつた。

五の六

暮の二十五日には、賞與金を貰つた勤人の樂い心持が、此の下宿にもあらはれた。

三田は田原に呼出しをかけて、何處かで飲まうと思つたが、會社の決算期に當つて多忙を極め、此の頃はちつとも姿を見せない友達は、其の晩も忘年會があると云つて斷つて來た。たつた一人、お馴染の蛸安で飲んで歸つた三田は、來年の三月頃から大阪の新聞に出す約束になつて居る、長編小說の書きかけを前にして机に對つた。

眞中の八疊の客はゐなくなつたので、今晩は其處に貯蓄銀行員と醫學生と婆さんが出開帳で花合に夢中になりながら、酒の後の高調子で喋る聲が、三田の室をも襲つて來た。殊に婆さんの得意の猥談は、かげで聞く者さへ思はず顏を赤らめるやうな事が多かつた。けれども夜の更けるに從つて、婆さんの聲は段々聞えなくなり、反對に貯蓄銀行員がはしやぎ出した。それは明かに勝負の結果を物語るものに違ひ無かつた。

ほんとに婆さんは、最初の景氣に似氣なく、結局散々負けてしまつた。饒舌も乾いて働かなくなつたのだつた。

「今日は如何なる吉日にて——賞與は入る、お花は勝つ、これでえゝ女子に惚れられたら太閤樣や。」

からかひ面で云はれゝば愈々苛々して、

「あかん、あかん。まんの惡い時は手役がついたかて、どもならん。この猪の面が好かん。」

めくつた札を、婆さんは手荒く叩きつけた。

「えゝ、やめた、やめた。寢酒など飲んで寢てこまそ。」

遂にあきらめて座を立つた。

「寢酒か。惡くないなあ。濟まんが僕にもつけてくれんか。肴は何もいらんから。」

室の外に出て行く婆さんの後から、貯蓄銀行員が聲をかけた。

「祝盃といふ奴さアハハハハハ」

「好かんたらし。」

婆さんはつぶやきながら下りて行き、醫學生も表二階に引上げ、貯蓄銀行員が六疊の方へ戻つて、一人でうたふ鼻唄が聞えた。家の内が靜かになつたので、三田は頭が冴えて、なほ一心に稿を續けた。

階下に下りた婆さんは舌打ちしながら漬物を切り、海苔をあぶつて膳立てをして、それ迄居睡りしてゐたお梅を喚起し、お銚子を二階に運ばせた。何時もなら自分で出かけて相手をするのだが、負腹の蟲が承知しないので、自分は自分で長火鉢の銅壺に一本つけた。

二階に行つたお梅はなか〳〵下りて來なかつた。何かくど〳〵喋つて居る男の聲の絶間に、微かに聞えるお梅の笑聲が婆さんの氣に入らなかつた。

「お梅、お梅。」

奥には弟夫婦や子供達も寢て居るのに、そんな事には頓着なく、大きな聲で呼んでみたが返事はなかつた。平生うるさくお梅に冗談をいふ男の樣子が、はつきり目の前に浮んで、折柄妙にひつそりと、物音も聞えない二階の一室が疑はしい景色に想像された。耳を傾けたが矢張り物音は聞えなかつた。手にした盃を下に置くと、婆さんは忍び足で梯子口迄行つて、一層耳に注意を集中した。

五の七

何の物音もしない。婆さんは、もう一度呼んでやらうかとも思つたが、何故だか聲が出なかつた。二三段忍んで上つた時、體の重みで梯子のきしむ音が、足の裏を脅かすやうに響いた。

とたんに、頭の上の六疊で、酔つた男の聲で、

「もう一本つけておくれ。お梅ちやんのお酌だと、ひとしほうまいや。」

「まだあがりまんの。もうやめにしてやすんだら如何だす。」
「いや、もう一本きりだ。一人で寢たつてつまるもんか。」
「あれえ。」
お梅の悲鳴と共に、どたんばたん音がして、障子をあけて廊下に飛び出して來る姿が見えた。婆さんは狼狽して長火鉢のところ迄逃げかへつて、何も知らない顏で、銅壺の湯加減を見る振をしたが、取つくらふ暇がなかつたので、半分立てた膝子僧が亂れた着物の間から顏を出して居た。
「えらいわるさ。」
銀杏返しの鬢の亂れを氣にしながら、お銚子を片手にお梅が下りて來た。顏は上氣して、呼吸ははずんでゐる。
「お酒おかはりだすと。」
不平さうにつぶやくと、婆さんの目の前を通つて臺所に行かうとした。

「お酒やつたらもう斷つときなはれ。」
婆さんには、お梅の姿が自分の目を憚かるものゝやうに見えた。
「そいでも、もひとつ呉れいうてきゝはれへんのやもん。」
「きかんかて構めへん。十二時にも一時にもなつて、酒飲むお客さんてあらへん、お茶屋とは違ふのやせ。」
自分の飲んでるのは、此の家の主人だからお客とは違ふのだと、腹の中で辯解しながら、初めて氣がついて、むき出しの膝頭をしまつた。
「お前が何時迄も、じやらじやらしてるよつてあかんのやで。外のお客さんの手前もあるやないか。男と女が酒飲んでるのやつたら、何したるのか大概わかつてゐさうなもんや。」
婆さんは嵩にかゝつて、自分の懸けた疑ひを口に出さないでは居られなくなつた。
「私何もお酒飲んだり爲えしまへん。」

空つぽのお銚子を持つたお梅は、ぺつたり其處に坐つてしまつた。

「飲んだかて飲まんかて、どつちやみち、夜さり男の室にゐたら、誰かつてをかし思ふがな。」

勝はこつて烟管を取上げて、深く煙を吸つた。

「そんな事何も知らん……」

涙ぐんだ顔をして、默つてうつむいて居たお梅が口惜しさうにつぶやいた。

「自分こそおかしいくせに。」

「何、何云うた。も一ぺん云うて見い。」

吸ひかけた烟管を握りしめて、婆さんは聲を震はせて立ちかけた。お梅は凝然と相手を見上げたが、直に權幕に壓倒されて伏目になつてしまつた。

折柄二階で手が鳴つて、

「おゝい、酒持つて來んかあ。」

と尻長に引いて怒鳴るのが聞えた。婆さんもお梅も、ぱつの悪い顔を見合せた。

「おゝい、酒持つて來んかあ。」

同じ言葉を、前よりも細かい節をつけて怒鳴つて、ばちばちばちばち手を叩く。いゝ機會にしてお梅は立上らうとした。

「何しに行く。」

はげしい勢ひで、婆さんは烟管の手を延ばして引戻したが、引かれまいとして膝を折つたお梅の手の德利は、長火鉢の角に當つて缺けてしまつた。

「阿呆め。」

その場の勢ひで、婆さんは癇癪まぎれに烟管を振上げて相手の背中を打つた。雁首が飛んで、向ふの隅の壁に當つた。

ひいいと嚙しめた聲でお梅は泣出した。

「おゝい、酒持て來んかあ。」

二階では意地になつて手を鳴らした。

五の八

翌朝お梅の姿は何處にも見えなかつた。昨夜の事件の後、突伏したまゝ何時迄もすゝりあげて泣いて居るのを横目で見ながら、もうひとつ、こつぷ酒を飲んで、その勢ひで寢てしまつたが、それつきり婆さんは何も知らなかつた。夜の間に出て行つてしまつたのか、今朝になつて逃げたのか一切わからなかつた。弟夫婦は事件のいきさつを知つてゐて、婆さんを非難する爲めにも、一大事らしく騒いで見たかつた。

「ひよつとして短氣な眞似でもされたらどないしやう。あて等知らん事やけれど。」

女房の方は殊に日頃の鬱憤を晴らし度い爲め、ほんとに身を投げてゞも呉れゝばいゝと思つてゐた。

「なあに、そんな事出來る女やあれへん。ほつといたら戻つて來るわ。」

親許に逃歸つたに違ひ無い。その外には行く處はないと、平氣を裝つてうち消しはするものゝ、婆さんの心の中にも心配ははびこるのであつた。何喰はぬ顏をして郵便局に行つて、吉野山の麓の村のお梅の實家に電報を打つた。

家内のごたゞゝを客に知られるのは面白くなかつたので、婆さんも弟夫婦も口をつぐんでゐたが、藪睨みの女の子は、子供に特有の好奇心を大人に傳へ度くて爲方が無かつた。

「お梅ちやん、いんでしもた。」

玄關で遊びながら、二階から下りて來る客を見ると、待構へて居て云ふのだつた。

「なに、お梅ちやんがいんでしもた。何處にいんだんだい。」

貯蓄銀行員は事件を知つて居るので、婆さんの耳を憚つて、子供の顏に近く口を寄せて聲をひそめた。

「何處や知らん。お婆ちやんにいぢめられていんでしもた。」

「ふうむ。」

事態容易でないと思つて眉をひそめたが、かゝりあひになるのを怖れる風で、さつさと銀行に行つてしまつた。女の子は頗る物足りなかつた。もつと大人にとりあつて貰ひ度かつた。

間も無く三田が下りて來た。上り口に腰かけて、編上の靴を穿いてゐる肩につかまつて、

「お梅ちやん、いんでしもた。」

又同じ言葉を繰返した。三田には何の事だかわからなかつたので、ふりかへつたばかりだつた。

「お梅ちやん、いんでしもた。お婆ちやんにいぢめられて。」

女の子は相手のわからないのが、もどかしさうに、藪睨みの目を大きくみはつて說明を加へた。

「お婆さんにいぢめられて行つてしまつたつて。」

三田の强い聲がきゝ返した。

「何處や知らん。いんでしもた。」

相手の心を動かした事を感じて、子供は滿足して二度三度頷くやうに首を振つた。

「さうか、いつてしまつたのかい。」

三田は苦笑して嘆息したが、直ぐに、何でも無いぢやないかと云つた風な大跨で、靴の音高く出て行つた。

正月も目の前に迫つて、何となく人の心も忙しい折柄、お梅のゐなくなつた事は下宿にとつても打擊だつた。案の定、親許に逃歸つたので、無事だといふ返事が來ると一安心したが、婆さんはその儘默つてはゐなかつた。

「これ迄えらい世話になつて、此のまゝ逃げよと思ても逃がすものか。」

今日迄に幾枚着物をこしらへてやつたとか、たゞ喰べさしてやつたとか數へあげ、

罵り立てたが、遠方に離れてゐては如何にもならないので。ぶつ〳〵口小言を云つて忌々しがりながら、自分自身吉野迄連れ戻しに出かけた。

六の一

大晦日の夜行で東京に歸つた三田は、松の内を遊び暮らして、十日近くに再び大阪へ立戻つた。

鞄をさげて下宿に歸り、玄關に上ると、狼狽て出迎へたのはお梅だつた。

「三田さん、お歸り。」

「おや、君も歸つて來たの。」

「へえ、暮のうちにな。」

ぱつの惡い笑ひを浮べて、頰邊を赤く染めながら鞄を取上げたが、何となく落つかない樣子で、づんづん二階に上つて行く三田を後から呼止めた。

「濟んまへんが一寸待つとくれやす。」

取上げた鞄を下におろして、逃げるやうに奥の室に馳込んだ。

樣子がわからないので、暫時は梯子の中段に佇んだが、薄暗い足だまりの惡い處なので、三田は上にあがり切つてしまつた。

不意に歸つて來た爲め、屹度室がかたづいて居ないので、まごついてゐるのだらうと輕く考へて、離室へ續く廊下を進んで行くと、意外にも自分の室の方で、婆さんとお梅と、もう一人誰だかわからない太い男の聲が聞えるのだつた。

「えらい濟まん事でおまんが、此のお室のお客さんが歸つて來やはりましたよつて、あつちへ移つて頂かんなりまへん……」

「そりやあ元々先客があるのは知つてるんだから、其の人が歸つて來たのなら爲方が無いが、それ程早く歸る筈ぢやあなかつたぢやないか。」

「へえ、二十日頃迄は歸れへんいうて行かはつたので御座りますが……」

婆さんは出鱈目な事を云つて、

「えらい濟んまへんなあ。」

と同じ言葉を繰返すのだつた。

三田は廊下に佇んではゐられなくつて、おめおめ引返すのはみつともないとは思ひながら、わざと足音荒く梯子段を下りて、玄關に殘されたまゝの鞄に腰かけて待つてゐた。洩れ聞いた言葉を綜合すれば、三田の留守中彼の室に、新來の客を入れ、しかもその人には、當分動かないでも濟むやうに云つて置いたが、突然彼が歸つて來たので、狼狽て裏梯子から駈上つて、室を空けさせやうとするところに違ひなかつた。善意であざむかれてゐた人は、自分に對していゝ氣持を感じないに違ひ無いと思ふと、三田は甚だ不愉快だつた。朝の空氣は冷く、靴下のさきから體中に泌みて來た。

「三田さん、えらい濟んまへんだした。」

餘程たつてから、何と詫びていゝかわからない樣子のお梅が、二階から馳下りて來

た。

「寒うおましたやろ。」

何かしら云はないでは申譯が無いので、ちひさい聲でいひながら、鞄を持つて先に立つた。

「ようお歸り。お目出度うさん。」

二階の廊下には婆さんが立つてゐて、相手の不機嫌を取返し度い心持から、殊更笑顔を見せて挨拶した。

「今朝程お歸りとは知りまへなんだので、お室をちらかしたまゝにして置きましたさかい、狼狽てゝ掃き出したりしましてな、えらいお待たせ致しました。」

何も三田は知らないのだと思つて居るので、外のお客を立退かせる爲めに手間取つたのだとは、おくびにも出さなかつた。

「貴方はん、えらい御ゆつくりだしたなあ、三箇日が濟んだら戻つて見えるやう云う

てゐやはりましたが、東京のえゝ人に引張られて、かへられしめへんのんだしたんやろオアハハ……」

そらぞらしい事を喋る相手を睨むやうな顔をして、苦り切つてゐる三田の口を開かないうちにと、高笑ひをきつかけに婆さんは、さつさと引上げて行つてしまつた。

六の二

留守の間に見も知らない男に占領されて居たと云ふ事が、何と無く室の居心地を惡くした。机の位置を直し、無惨に横倒しになつて居る首と胴の別々になつた花賣娘の人形を直立させ、インキ壺や洋筆の置場所も以前の通りにしたが、ふと氣がつくと、机の方々に鉛筆を削つた痕が著しい。曳出をあけて見ると、書きかけの原稿も、いろんな人から來た手紙も、亂雜に入れて置いたのが、その儘になつて居たのはよかつたが、自分の知らない人間から、自分の知らない人間に宛てた手紙や葉書や、商店や飲食店の

受取證などがまじつて居るのを發見した。それは留守中此の室を占領した男のものに違ひ無かつた。用の無い時の室を貸すのはまだしもだが、机迄もそのまゝお役に立てるのは怪しからない。その男は此の机にもたれて幾日かを過したのであらうが、既に他人の机の上で無遠慮に鉛筆を削り、他人の机の曳出に手紙を入れる位だから、曳出の中の他人の手紙も平氣で讀んだに違ひ無い。三田はすつかり曇つた心持になつてしまつた。母のなさけの座蒲團も、此の分ではその男の尻に敷かれたであらう。大輪の白牡丹の花瓣には煙草の吸殼でも落したらしい燒焦があつた。

間も無く茶道具を運んで來たお梅の目の前に、三田は他人の所有に屬する手紙や葉書や受取證を、一束にして默つて押してやつた。

「まあ、こんな物が殘つてましたんの。濟んまへんなあ。」

耳の根もとから襟首の中迄も眞赤になつて詫びた。お梅のたどたどしい話によると三田が東京に立つと間も無く、師團に勤める軍人が室を借りに來たが、たつた一間空

いてゐる八疊は氣に入らないので、三田の歸つて來る迄といふ約束で、此處に入れたといふのだつた。

「士官さんでな、面白いお方だつせ。」

氣のいゝ女は、三田の不機嫌をとりなす積りで、そんな事もつけ加へた。

「それぢやあ其の人は、結局氣に入らない八疊に入れられてしまつたわけだね。」

未だ當分はあいてると嘘をつかれて、此の家に靴を脱いだ軍人も、矢張り下宿屋の餌食になつたのだと思ふと、止宿人の共同の利益の爲めにも公憤を感じた。

「いゝえ、八疊やつたら氣に入らんよつて、出て行く云ははるよつて、お婆ちやんは表二階の書生さんが歸つて來やはつたら、室をかへ事して貰ふたらえゝ云ふてはります。」

「ふうむ。」

三田は全く不愉快になつて、默つて相手を注視した。何時迄も彼の瞳は動かないので、お梅もうつむいて疊ばかり見詰めて居たが、何處かの室で手の鳴るのをいゝ事にして、もう一度、

「えらい濟んまへんでしたなあ。」

と繰返して、膝の前の軍人宛の手紙やなんかを手につかむと、逃げるやうに廊下に出て行つた。

六の三

暮の忙しい最中に親許へ逃げ歸つたお梅は、直ぐに婆さんが追かけて行つて、人のいゝ妹をだましすかして連戻つたが、女房さんは此頃體の具合が惡くて一層甲斐性が無くなつたので、前にも增して人手は足り無かつた。何處でも手の入る正月の事で、おまけに方々の桂庵から、幾度世話して貰つてもゐつかない爲め、すつかり愛想をつかされてしまつたので、女中を雇入れる望は全くなかつた。身寄知己に頼んでも、口

先ばかりで同情してゐて、ちつとも本氣にはなつて呉れなかつた。あの婆さんがゐてはといふのが、誰の頭にも第一に浮ぶのだつた。

「こない忙しかつたら、正月やかてお芝居ひとつ見られへん。」

婆さんは弟夫婦の耳に、毎日々々同じ言葉を、幾度となく吹込んだ。或日も執拗く恩痴と厭味を並べ立てゝゐると、折柄遊びに來た酒屋の若いおかみさんが、

「私の親類の者で一人奉公に出し度い娘があるのやけどな。」

と、耳寄りな話をしながら、どうしたのか語尾を濁して小首を傾けた。

「へえゝ、おそのさんの親類で。なんぼ位の娘はんだ。」

忽ち婆さんは逃すものかといふ形で膝を乗出した。

「まだ十四……いゝえ、あけて十五だんが。小柄な可愛らしい顔つきしてんのやがな。」

又しても口籠つて、

「矢張り、あかんわ。」

「あかん事があるものか。十五やつたら恰度よろしいが。」

「そやけどな、もひとつ面白無いやうな氣もするのやわ。」

「何で。」

「何でいふと……」

うすいそばかすの見える目のふちを赤くして、

「手癖が惡いのやもん。」

「えゝ。」

流石に婆さんも思ひがけなかつたか、煙草の煙を長々と吹いて考へた。

「去年の春頃から、二三べん他所へ手傳にやつた事もあるのやけれど、時々惡い根性出しては歸されてしまふ。小學校も級長をつとめて御褒美貰ふた位よう出來たし、平生は悧巧な娘やがなあ。」

「生れつきやなあ。」

「ほんまに生れつきや。」

二人とも同時に嘆息した。

「けれども、うちも人手は無し、ちよつと位手癖が惡いいふたかて、こつちで氣いつけてたら物の無いやうになる事もあるまいし、どんなもんやらう、ひとつ連れて來てもろたら。」

婆さんは充分未練があつて、先刻から傍で話を聞きながら、わざと知らない振をして新聞を讀んでゐる弟の方に聲をかけた。

「さうやなあ、手傳ふて貰ふたら結構やが、お客さんの物に間違ひでもあつたら困るな。」

「そんな事云ふて外に心當りでもあるのんか。私やお梅ばかりせつせと働いて、肝心のおらくさんが愚圖愚圖してるのやつたらかなはんがな。」

婆さんは弟の無關心な態度がひどく癪に障つて、又しても弟嫁の惡口に鉾先を向け、

つばきを飛ばして辯じ立てた。結局弟は又新聞を取上げて沈默する外爲方がなくなつたが、

「そんなら、貴方の好きなやうにしたらえゝやないか。」

と捨科を殘して立上つて、女房の寢てゐる奥の室に引込んでしまつた。

六の四

三四日たつと、酒屋のおかみさんは、從妹にあたる小娘を連れて來た。少しばかり猫脊の氣味あひの、ちいつぽけな體つきだつたが、色の白い目の悧巧に働く可愛らしい顔だちで、最初から人みしりをしないで、さも物馴れた樣子で客の給仕に出た。婆さんの敎へる數々の事は直ぐ飲込んで、その次からは指圖されないでもちやんと爲てのけた。

「ほんまに悧巧な娘やなあ。お梅等ねきいよりつかれへん。」

婆さんも驚嘆して、手癖の惡いといふ事などは、殆んど問題にもならなくなつてしまつた。

そのかはり下宿にとつては、飯を喰ふ口がひとつ殖えたのと、悧巧者なら悧巧者だけに、それ相當の給金をやらなくてはならなかつた。婆さんと亭主は此の事で又言ひ爭つた。

亭主に云はせると、暮に取極めた約束で、正月からは婆さんの取分もお梅の貰ひ物も增したので、それだけ自分達の懷に入る高は減る勘定になる。出來る事なら女手は殖し度くないと思つて居たが、婆さんが無理にも小娘を連れて來させたので、いはゞ爲方なく使ふ事になつたやうなものだから、充分の事は出來兼る。若し婆さんとお梅へやるものが去年通りなら、世間の女中並に出してもいゝといふのだつた。

婆さんは婆さんで、自分は元來働かないでもいゝ身分なのに、親切で働いてやつてるので、若し自分が氣を配つてやらなければ、此の家の商賣はあがつたりだ。女房さ

んがくる〳〵働くなら、それで安心してもゐられるが、それは甲斐性無しで、おまけに女中らしい女中がゐなくては、いくら辛棒强いお客でも逃げ出してしまふに違ひ無い。自分達の取分の殖えたのは當然で、それとこれとは話が違ふといふのだつた。

「此の頃の此の景氣で、月々の儲けは以前の二倍三倍やないか。あて等もつと貰ふたかてびくともせえへんやないか。」

「貴方の云ふやうなもんやあれへんせ。雜用は高うなるし、稅は高うなるし……」

何時も二人が繰返す水かけ論が終る時を知らなかつた。

「そやさかいにあてが云ふ通り、宿料をもちつと上げたらえゝのんや。世間の景氣がようなつたら、お客さんの懷かて都合がえゝわけや。」

「そないいふたかて。暮に上げたばかりやよつてな。又上げるといふのも面白うない。」

「面白うないいふて、どないしても儲けるのが商賣の道やで。一ぺんにうんと上げんかてよろし。又お米があがつたさかい、五分か一割あげても誰がぐづ〳〵いふもんか。」

「さうもいかんよつてなあ。六疊のお客さんや、離室の階下のお客さんは算盤が細いよつてなあ。」

「そんならやかましい人は少しあげて、やかましい事云はん人は、うんとあげたらええやないか。離室の變人さんなら默つて承知するに違ひ無いわ。」

「三田さんか。」

亭主は長く喋る根氣がないので、婆さんと向きあつて話をしてゐれば、結局その云ふまゝになるよりほかは道がなかつた。それでも矢つぎばやの値上げは穩當で無い氣がするし、人を選んでお人よしには割增の高を多くするのは愈々ひどい氣もしたが、又ひとつの名案でない事もないと思つた。

「まあ、もひとつ考へさせて貰はう。惡いやうにはせん積りや。」

さう云つて話を切上げてしまつた。

「考へる考へるいふて、何時までたつても埒のあかんのがいつものこつちや。」

婆さんは、何時に變らぬ弟の煮え切らない態度に憤慨した。

六の五

亭主はつくづく考へて見た。石鹼屋の販路擴張係をやめて、自分で貯へた小金と今の女房の身についてる金とを合せて資本にして、姉の商賣を借りて下宿を引繼いだ頃とは違つて、思ひもかけなかつた好景氣が多分の收入を持つて來た事は、いかにも婆さんの云ふ通りだつた。けれども折角の其の儲けを、些かたりとも目に見える事で減らしてしまふのは惜しかつた。收入の殖えた事は自然に思はれ、支出の殖える事は、それが必要缺く可らざるものでも、不自然に思はれた。婆さんやお梅の取分を增した上に、又小娘に給金を出すのは理窟が合はないとさへ考へられるのだつた。そこで自分の收入を、五十錢でも一圓でも減らさずに、婆さんやお梅を滿足させ、且小娘の餘計な給金迄支拂ふには、如何しても唯一の收入の道である宿泊料の値上げか、客に喰